

賀来中学校遺跡

大分市賀来小学校屋体増改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

大分市教育委員会

序 文

本市は、九州の東玄関口として古くから文化の交流が見られる地であり、文化的にも豊かな発展を遂げてきた所でもあります。

そのような先人の築いた文化の足跡は、市内各所に残されており、大分市教育委員会では、大分市の歴史と文化の原点として、これらの調査、保護、保存に向けて各種の事業を進めているところであります。

とりわけ他事業との関連における、緊急性を要する埋蔵文化財の発掘調査事業につきましては、鋭意その充実に努力いたしているところであります。本書は、平成5年度に賀来小学校屋体改築工事に伴って、調査を進めました大分市賀来の賀来中学校遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、奈良～平安時代に造られた溝が発見され、国分寺と関連した施設として注目されるなど、大きな成果を収める事ができました。

本書の発刊、並びに発掘調査にあたりご配慮、ご協力頂きました関係各位に対して深く感謝の意を表わすと共に、市民をはじめ、多くの方々に文化財保護の関心が高まる一助となれば幸いです。

平成6年3月31日

大分市教育委員会

教育長 清瀬 和弘

例 言

- 1 本報告書は大分市大字賀来字脇に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分市教育委員会が調査主体となって、平成5年7月から8月にかけて実施した。
- 3 本書の執筆は池邈千太郎がおこなった。
- 4 遺構の実測は担当者が主としてこれにあたり、写真撮影は担当者がおこなった。
- 5 遺物の実測は担当者がおこない、拓本は栗井三枝（大分市教育委員会臨時職員）がおこなった。
- 6 実測図製図は阿部和子・栗井三枝があたった。
- 7 遺物整理は二宮恵子・阿部和子・栗井三枝があたった。
- 8 遺物の写真撮影は担当者がおこなった。
- 9 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
- 10 本文中の遺構番号については混乱を避けるため、原則として現場時に使用したものをそのまま使用している。

・本文中で使用する略号は次の内容を意味する。

S D－溝状遺構

S E－井戸遺構

S K－土坑状遺構

S X－柱状遺構（不明遺構）

- 11 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物 番号	挿図 番号	出土区 遺構名	種	胎土		色調		器面調整		法量				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑦	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨	⑨	⑩

- ① 1からの通し番号で記述する。
 - ② 挿図番号に一致する。
 - ③ 項目10に準ずる。
 - ④ 判明する器種について記述する。
 - ⑤ 胎土中に含まれる混和材について記述する。
 - ⑥ 径約1mmのものを細粒とし、それ以下を微粒、それ以上を小粒として標記する。
 - ⑦ 色調について記述する。
 - ⑧ 器面調整について記述する。複数段で標記される基本的に上位のものが上部調整を示す。
 - ⑨ 計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は（ ）にて表示する。
 - ⑩ 特記事項について記述する。
- 12 本書の編集は池邈がおこない、校正は井口あけみがおこなった。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査日誌抄	2
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3章 発掘調査の記録	6
第1節 調査の概要	6
1. 調査区の設定	6
2. 調査経過と概要	6
第2節 遺構と遺物	7
1. 溝状遺構 (SD)	7
1号溝状遺構 (SD01)	7
2号溝状遺構 (SD02)	18
8号溝状遺構 (SD08)	21
9号溝状遺構 (SD09)	23
10号溝状遺構 (SD10)	23
2. 土塋 (SK)	24
9号土塋 (SK09)	24
10号土塋 (SK10)	26
13号土塋 (SK13)	26
15号土塋 (SK15)	27
21号土塋 (SK21)	27
3. 井戸跡 (SE)	27
1号井戸跡 (SE01)	27
2号井戸跡 (SE02)	27
4. 柱穴遺構 (SX)	27
SX01	28
SX05	28
SX10	29
5. その他の遺物	30
第5章 まとめ	31

図版目次

第1図	賀来中学校遺跡調査地点位置図（1/5,000）	2
第2図	賀来中学校遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）	5
第3図	賀来中学校遺跡調査グット配置図（1/400）	6
第4図	賀来中学校遺跡遺構配置図（1/160）	9～10
第5図	SD01 平面・断面図（1/60）	11～12
第6図	SD01 出土遺物①（1/3）	13
第7図	SD01 出土遺物②（1/3）	14
第8図	SD01 出土遺物③（1/3）	15
第9図	SD01 出土遺物④（1/3）	16
第10図	SD01 出土遺物⑤（1/3）	17
第11図	SD02 平面・断面図（1/20）	18
第12図	SD02 出土遺物（1/3、105～108は1/2）	19
第13図	SD08 平面・断面図（1/3）	21
第14図	SD08 出土遺物（1/4）	22
第15図	SD09 出土遺物（1/2）	23
第16図	SD10 出土遺物（1/3）	24
第17図	SK 出土遺物①（1/3）	25
第18図	SK 出土遺物②（1/3）	26
第19図	SE01 平面・断面図（1/30）	28
第20図	SE 出土遺物（1/2）	29
第21図	SX 出土遺物（1/3）	29
第22図	その他の出土遺物（1/3）	29

表目次

表1	周辺遺跡一覧	4
表2	遺物観察表①	34
表3	遺物観察表②	35
表4	遺物観察表③	36
表5	遺物観察表④	37
表6	遺物観察表⑤	38
表7	遺物観察表⑥	39
表8	遺物観察表⑦	40

写真図版目次

図版1	SD10 掘り下げ状況（東より） SD10 土層断面状況（東より） SD10 土層断面状況（東より）	43
図版2	南側調査区全景（北より） SD08 遺物出土状況（東より） 北側調査区全景（北より）	44
図版3	出土遺物①	45
図版4	出土遺物②	46
図版5	出土遺物③	47

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

賀来中学校遺跡の所在する地は、これまでの調査により低地集落の存在を裏付ける重要な所である。これまで、集落を囲む環濠が見られる他、壺棺墓の発見等が挙げられよう。さらに中世には、この地に賀来氏の館が推定されている場所でもあり、併せて注目すべきものである。

今回の調査は、こうした場所での賀来小学校屋体の改築事業に伴うものであり、体育施設の老朽化と新しい設備の必要性により改築の計画が出されたものである。こうした状況により、大分市教育委員会では、この地域の遺跡の重要性を重く見て、平成3年11月20日に試掘調査を行った。その結果、地表より30～50cm下部より、溝状遺構と円形の土坑を確認した。

こうした結果に基づき、平成5年7月19日～同8月31日の間、約450㎡について発掘調査を実施することになった。

第2節 調査組織

調査主体者

大分市教育委員会 教育長 清瀬 和弘

事務局

大分市教育委員会文化振興課

内田 司（大分市教育委員会文化振興課課長）

秦 政博（ 同上 参事）

宮崎 英雄（ 同上 文化財室室長）

佐藤 良蔵（ 同上 主査）

村山 貴子（ 同上 主事）

大分市教育委員会理財課

由布 尚武（大分市教育委員会理財課課長）

丸山 幹雄（ 同上 主任）

調査担当者

池邨 千太郎（大分市教育委員会文化財室技師）

調査作業員

佐藤フキ子・佐藤久子・佐藤ヨシ子・福田アサ子・福田伸子・猪原リエ・
佐藤二男・佐藤チズ子・麻生マツ子・佐藤二三子・佐藤敦子・小野淳子・
佐藤美知代・三ヶ尻トヨ子・小野昌子・嶋田由希・池辺光太郎・橋本成彦・
猪熊真実

整理作業員

二宮恵子・阿部和子・粟井三枝

第3節 調査日誌抄

- 7月19日 調査開始。重機による表土剥ぎを行う。
- 26日 遺構検出作業を開始する。
- 8月 4日 遺構全体の精査を行い、遺構検出状況の写真撮影を行う。
- 5日 1号溝の掘り下げを開始する。
- 6日 賀来小学校3年生と6年生を対象に現地見学を行う。
- 1号溝の遺物の取り上げを行う。
- 18日 2号溝の掘り下げを開始する。
- 19日 2号溝の断面図化を行う。
- 20日 1号・2号溝の平面図化を開始する。
- 21日 2号溝の遺物の図化作業を行うと共に取り上げを行う。
- 24日 8号・9号溝の掘り下げを行う。
- 8号溝の遺物の取り上げを行う。
- 25日 遺構全体の遺構図の作成を開始する。
- 30日 全体写真の撮影のための精査を行う。
- 31日 遺構全体写真の撮影を行う。
- 調査終了。



第1図 賀来中学校遺跡調査地点位置図 (1/5,000)

第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡

賀来中学校遺跡は大分県大分市大字賀来字脇に所在する。

遺跡の所在する地は、大分川によって形成された河岸段丘によるもので、標高15～20mを有する。河岸段丘は対峙する小野鶴や賀来川沿いの宮苑にまで広がっている。この段丘面を形成した大分川は国分から賀来にかけて東側を北流し、緩やかなカーブを描きながら途中で賀来川や七瀬川などと合流し別府湾に注いでいる。

この付近の場所は、南に1.2kmの所に豊後国分寺があり、東に4～5kmの大分市古国府・羽屋地区では豊後国府に推定されている所に位置している。

歴史的環境を時代順に追ってみると、旧石器時代から文化が築かれはじめている。大分市の賀来周辺における旧石器の遺跡は北側に位置する標高70～110mの庄ノ原台地の庄ノ原遺跡^{II3}や西側の標高70～90mの河岸段丘面における下黒野遺跡^{II1}・野田山遺跡^{II2}等で確認されている。

縄文時代においても旧石器と同じような分布を示しており、庄ノ原台地や野田山台地に遺跡が見られる。

弥生時代に入ると稲作の拡大により経済的な生活基盤が確立してくる。こうした中で人々は集落を中心に経済的な基盤が形成されはじめたようだ。この時期の集落は低地や微高地に選地して、生活を営んでいる。低地の遺跡としては賀来中学校遺跡^{II3}があり、数回にわたる発掘調査によって弥生時代を中心とする環溝集落の存在や小児用の壺棺墓など墓域の形成が明らかにされ、集落の変遷をたどることができる。また、下郡遺跡^{II4}においても、この地で拠点となる集落が見つかっていると同時に、稲作に関係した多量の木製品や家畜が行われていたことを示す獣骨等が出土している。一方、低地に対して台地上では庄ノ原遺跡^{II5}・尼ヶ城遺跡などで見られる。尼ヶ城遺跡では標高72mの丘陵突端部をV字溝で独立させ、その内側に集落を形成している。弥生時代終末の住居跡からは鏡を破碎したものが見られ、さらに守岡遺跡^{II6}・雄城台遺跡^{II7}の類例も併せて古墳時代に切り変わる変革が示唆できる。

古墳時代の集落は、賀来中学校遺跡^{II8}や下郡遺跡^{II9}など低地にその範囲を広げ、それとは対象的に台地上には多数の古墳が築かれ始める。古墳の分布は大きく庄ノ原台地と木ノ上台地に分けられ、それぞれに有力集団のまとまりが把握できる。庄ノ原台地では前方後円墳の蓬萊山古墳^{II10}を中心に、尾根筋に群集墳が形成されている。時代が下がると、古墳の分布は台地の裾部に移り、千代丸古墳^{II11}・丑殿古墳^{II12}・弘法穴古墳^{II13}に見られる巨石石室墳が構築されている。さらに、谷を挟んだ北側斜面に石櫛式石室を持つ終末期の古宮古墳^{II14}が所在する。一方、南側の木ノ上台地周辺では、前方後円墳の御陵古墳^{II15}を中心に、その丘陵上には高塚墳や横穴墓が分布している。中でも世利門古墳^{II16}は家形石棺を内部主体に持ち、貝製貝釧を出土させている。また、下ヶ迫古墳^{II17}では凝灰岩を用いた箱式石棺に、鏡・鉄剣・直刀・鉄鏃・刀子を副葬していた。

律令時代は政治体制の確立と新しい文化が芽生えてきたといえる。諸国に国分寺を建立させ奈良の東大寺を総本山として仏教によって国を統一させるとともに、政治・文化に多大なる影響をあたえた。市内では奈良～平安時代の古瓦が出土している永興寺^{II18}や金剛宝戒寺^{II19}が建立され、瓦の中に百済系単弁瓦が見られる。

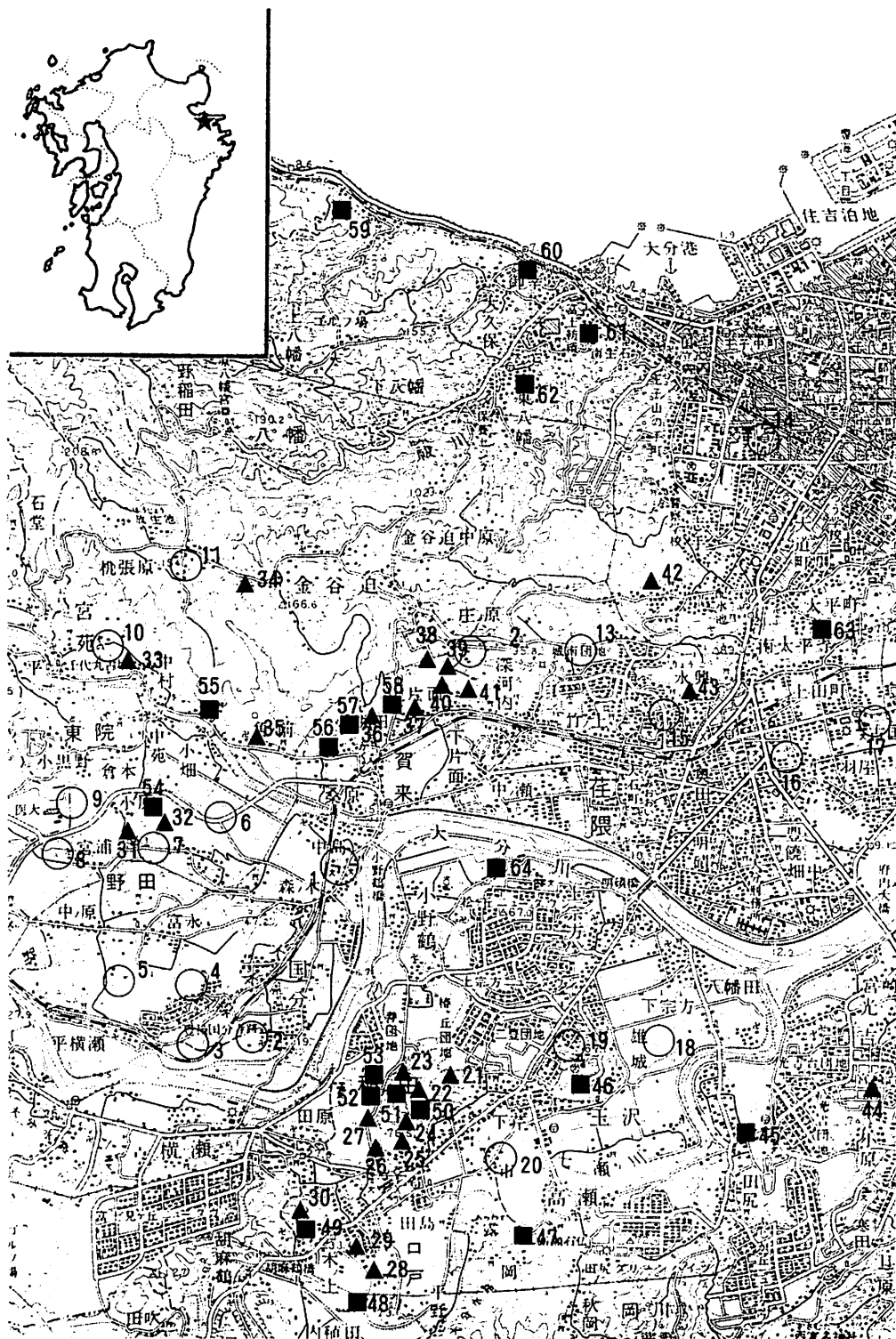
国分寺では、発掘調査によって東西182m、南北300mを超える寺域が広がっており、伽藍配置についてもその全貌が判明してきている。また、国分寺と共に建立された国分尼寺につ

いては国分尼寺と書かれた墨書土器が国分寺の発掘調査から出土していることから、近接して建立された可能性も考えられる。

- 註1)「下黒野遺跡」大分県狭間町大字古野字下黒野所在遺跡の調査 大分県教育委員会 1974
 註2)「野田山遺跡」大分市教育委員会・三井不動産株式会社 1974
 註3)「賀来中学校遺跡」大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1992
 註4)「下部遺跡群」大分市下部地区上地区画整理事業に伴う発掘調査概報 (3) 大分市教育委員会 1992
 註5) 讃岐和夫「海と里のムラ」『大分市史』上巻 大分市 1987
 註6)「守岡遺跡」昭和50・51年度発掘調査概報 大分市教育委員会 1979
 註7)「雄城台遺跡・第8次発掘調査の概要」大分県教育委員会 1987
 註8) 註3に同じ
 註9) 註4に同じ
 註10) 高橋徹「古墳を築いた人たち」『大分市史』上巻 大分市 1987
 註11) 註10に同じ
 註12) 註10に同じ
 註13) 註10に同じ
 註14)「古宮古墳」大分市文化財調査報告 第4集 大分市教育委員会 1982
 註15)「昭和43年度 緊急発掘調査概要―御陵古墳とその周辺―」大分県教育委員会
 註16) 賀川光夫「五遺骸以上合葬の一例 ―大分県(豊後)大分村大字木上字世利門古墳」『考古学雑誌』第四十四巻第一号 1958
 註17) 註10に同じ
 註18) 後藤宗俊「そびえる国分寺の塔」『大分市史』上巻 大分市 1987
 註19) 註18に同じ
 註20)「豊後国分寺跡」大分市教育委員会 1979
 「国指定史跡豊後国分寺跡 環境整備事業報告書」大分市教育委員会 1992

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	賀来中学校遺跡	2	豊後国分寺跡	3	六重原遺跡
4	国分遺跡	5	野田遺跡	6	賀来条里跡
7	中尾遺跡	8	野田山遺跡	9	下黒野遺跡
10	宮苑遺跡	11	机張原遺跡	12	庄ノ原遺跡
13	城南遺跡	14	東田室遺跡	15	永興遺跡
16	羽屋園遺跡	17	古国府遺跡群	18	深町遺跡
19	雄城台遺跡	20	植田市遺跡	21	下迫古墳
22	虎御前古墳	23	漆間横穴墓群	24	漆間古墳
25	世利門古墳	26	稻荷古墳	27	大將軍遺跡
28	浅草神社古墳	29	御陵古墳	30	山伏古墳群
31	中尾古墳2号墳	32	中尾古墳	33	千代丸古墳
34	金谷迫古墳	35	餅田古墳群	36	井手ノ上古墳
37	丑殿古墳	38	蓬来山古墳	39	田崎古墳群
40	万寿山古墳群	41	深河内古墳	42	古宮古墳
43	弘法穴古墳	44	千人塚古墳	45	東山田横穴墓群
46	雄城台下横穴墓群	47	高瀬横穴墓群	48	岩崎横穴墓群
49	木ノ上峠横穴墓群	50	高来山横穴墓群	51	大曾3横穴墓群
52	大曾2横穴墓群	53	大曾横穴墓群	54	小原横穴墓
55	岩御堂横穴墓群	56	餅田横穴墓群	57	井手ノ上横穴墓群1
58	井手ノ上横穴墓群2	59	白木横穴墓群	60	蟹喰横穴墓群
61	生石横穴墓群	62	穴蟹喰横穴墓群	63	南太平寺横穴墓群
64	小野鶴横穴墓群				



遺跡 ▲古墳 ■横穴墓群

第2図 賀来中学校遺跡の位置と周辺地図 (1/50,000)

第3章 発掘調査の記録

第1節 調査の概要

発掘調査は平成5年7月19日～8月31日の間実施した。

1. 調査区の設定

賀来中学校遺跡を調査するにあたり、調査区にグリッドを設定した。調査対象区域全域は東西30m、南北40mあり、この中に磁北で5m四方の区割線を設定し、合計40に区画した。北から南に向かって南北軸にアルファベットでA～Hとし、西から東に向かって東西軸に数字の1～5とした。

なお、標高については180m先にある水準点より運んで使用した。

2. 調査経過と概要

平成3年11月20日に実施した試験掘調査により、溝状遺構や円形の土坑が検出された。

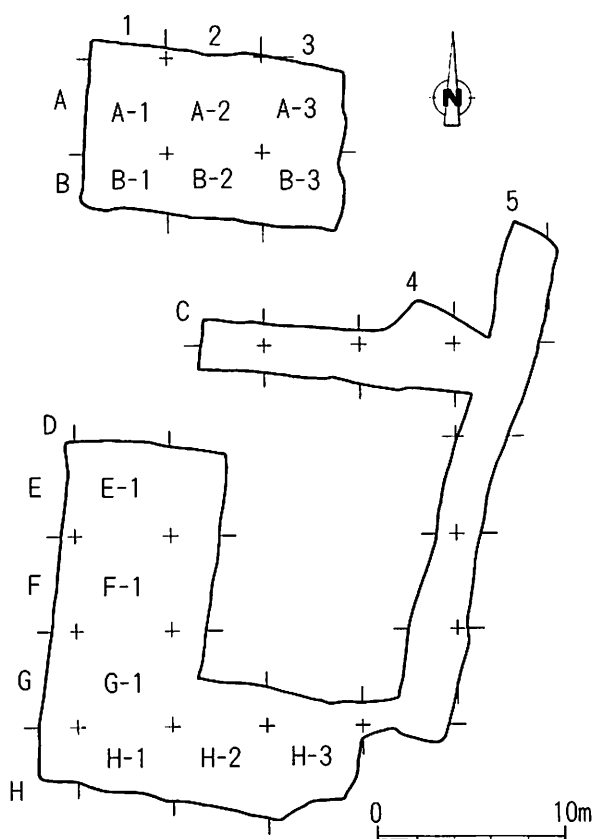
この結果、平成5年7月19日より重機による表土除去作業を始め、本調査を開始することになった。表土剥ぎ

は調査区東側から開始したが、遺構が検出されなかったので、さらに西側にT型に掘り広げた。面積は126㎡である。しかしながら、旧体育館の基礎が残っており、遺構検出には至らなかった。なお、東側に一段地山が低くなっている事が分かった。こうした事から旧体育館が建てられていた所は、基礎によってかなり、攪乱されていることが分かったため、体育館が建てられていなかった周囲を調査することになった。

北側の調査区において、南北方向に8m、東西方向に13mの広さを開けた。やはり、東側部分には体育館の基礎による攪乱が見られたが、西側において土坑が検出された他、東西方向に溝状遺構が延びている事が判明した。

一方、南側の調査区においては、体育館の周囲をL型に掘り下げた。南北方向に18m、東西方向に17m、面積は200㎡の広さである。調査区全体に近年の細長い溝状の掘り込みが幾重にも延びており、遺構の検出に困難を窮めた。

最終的に調査は1200㎡を事業面積の内、450㎡が対象面積となり、検出した遺構は、溝状遺構、土坑、柱穴等であった。



第3図 賀来中学校遺跡調査グリッド配置図(1/400)

第2節 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は溝状遺構5条、土坑20基、井戸跡2基、柱穴状遺構多数である。出土した遺物は、縄文時代後期、弥生時代終末～古墳時代初頭、奈良～平安、中世のものが見られた。

1. 溝状遺構

1号溝 (SD01)

SD01は北側調査区において東西方向に走る溝状遺構である。検出長は東西に14mにおよび、東側では溝の方向がやや東南東方向に向いている。溝の北側での立ち上がりは調査区外に延びているため、検出されていない。このため、調査終了間際に溝の一番東側の壁面において、北側へ延びるトレンチの掘削をおこない、溝の幅を土層断面によって観察した。しかし、予想に反して溝の幅が広く、現在の構築物の下まで延びていることが判明したため、溝の幅を確認することはできなかった。なお、土層断面において北側の床面から壁の立ち上がる部分を確認できたため、溝の床面は幅2.8mを有することが分かった。この壁面の立ち上がりを基に溝の幅を推定したところ7mを越える規模であることが判明した。

溝の掘り方は逆台形を為し、南壁面に一段の平らなテラスが見られた。溝の深さは検出面より1.1mを有する。床面はほぼ平らに掘削されている。

出土遺物は上層から下層にかけて、弥生土器小片や須恵器の甕片、土師器の坏・蓋・皿・碗・短頸壺・高坏等が見られた。弥生土器は摩滅したものが多く、上層～下層にかけて流れ込みとして確認された。

溝内における土層の堆積状況は、自然堆積により砂質のもので、途中、層が入り乱れているところから掘り返した痕跡も見られた。

なお、溝の検出面と同じ層から1条の溝状遺構(SD10)が検出された。掘り込まれた溝は、幅1m程、深さは西側で60cm、東側で25cmの断面U型の掘り込みを呈するものである。

出土遺物

遺構から出土した土師器の器種の内、最も坏の割合が多い。図化できたものは50個体あまりに及ぶが、図化できないものを含めると倍以上の点数になろう。次に多いのが、蓋の順となっている。須恵器は、土師器の1～2割程度の量で器種は坏・蓋・甕等である。

土師器坏 (001～049)

出土した坏を手法により3類に分類し、さらに、口縁部が外反するもの(a類)、口縁部が直線的に伸びるもの(b類)に細分することができる。

I類…内面・外面共にヘラミガキを施し、底部は回転ヘラケズリをおこなっている。

I a類 (001～006)、 I b類 (007・010)

II類…内面・外面共にナデを施し、底部は回転ヘラケズリをおこなっている。

II a類 (011～020)、 II b類 (021～033)

III類…内面・外面共にナデを施し、底部は回転ヘラ切りをおこなっている。

III a類 (034～037)、 III b類 (038・039)

土師器蓋 (050～062)

出土した蓋を形態と手法により4類に分類した。

a類(50・51・54)…口縁端部で屈曲し、口唇部がくちばし状を呈する。内面・外面共にヘラミガキを施す。天井部は回転ヘラ削り後ミガキをおこなっている。

b類(52・53・55)…口縁端部で屈曲し、口唇部外側がわずかにつまみ出されている。内面・外面共に回転ヨコナデを施す。

c類(57・58・59)…口唇部が外側に張り出している。内面ヘラケズリを施こし、外面はヘラミガキあるいはヨコナデをおこなう。天井肩部はヘラ削り後ミガキを施す。

d類(60・61)…口唇部におけるつまみ出しが見られない。

土師器皿 (063～066)

(065)…体部が外傾して立ち上がり、口唇部でわずかにつまみ出される。内面・外面共にヘラミガキを施し、底部はヘラ削りをおこなっている。

(066)…平坦な底部から体部が反り気味に外傾して立ち上がる。内面・外面共にヘラミガキを施し、底部はヘラ削りをおこなっている。

土師器碗

出土した を高台の形態と手法により3類に分類した。

a類(067・068・071)…外面にヘラミガキが施され、口縁端部で短く外反する。高台は体部と底部の境に見られ、やや外方に張る。

b類(070)…a類に比べ高台の位置が体部と底部の境より内側に付く。

c類(069)…高台がハの字に広がらず、垂直に取り付く。

土師器甕 (072～076) …特徴としては企球型煮沸具とされる甕の一群である。

(072)…口唇部は肥厚せず、丸味をもって終わる。口縁部は丸味をもって外反している。外面には刷毛目による整形は行われていない。

(073)…口唇部には肥厚しており、丸味をもって終わる。口縁部は外反気味に伸びている。

(074)…口唇部がやや肥厚し、平坦面が内傾する。口縁部は、内湾し外面中位で膨らみがある。

(076)…口縁部が短く、くの字形に外反し、頸部に稜を有する。口縁端部では平坦面をもっている。

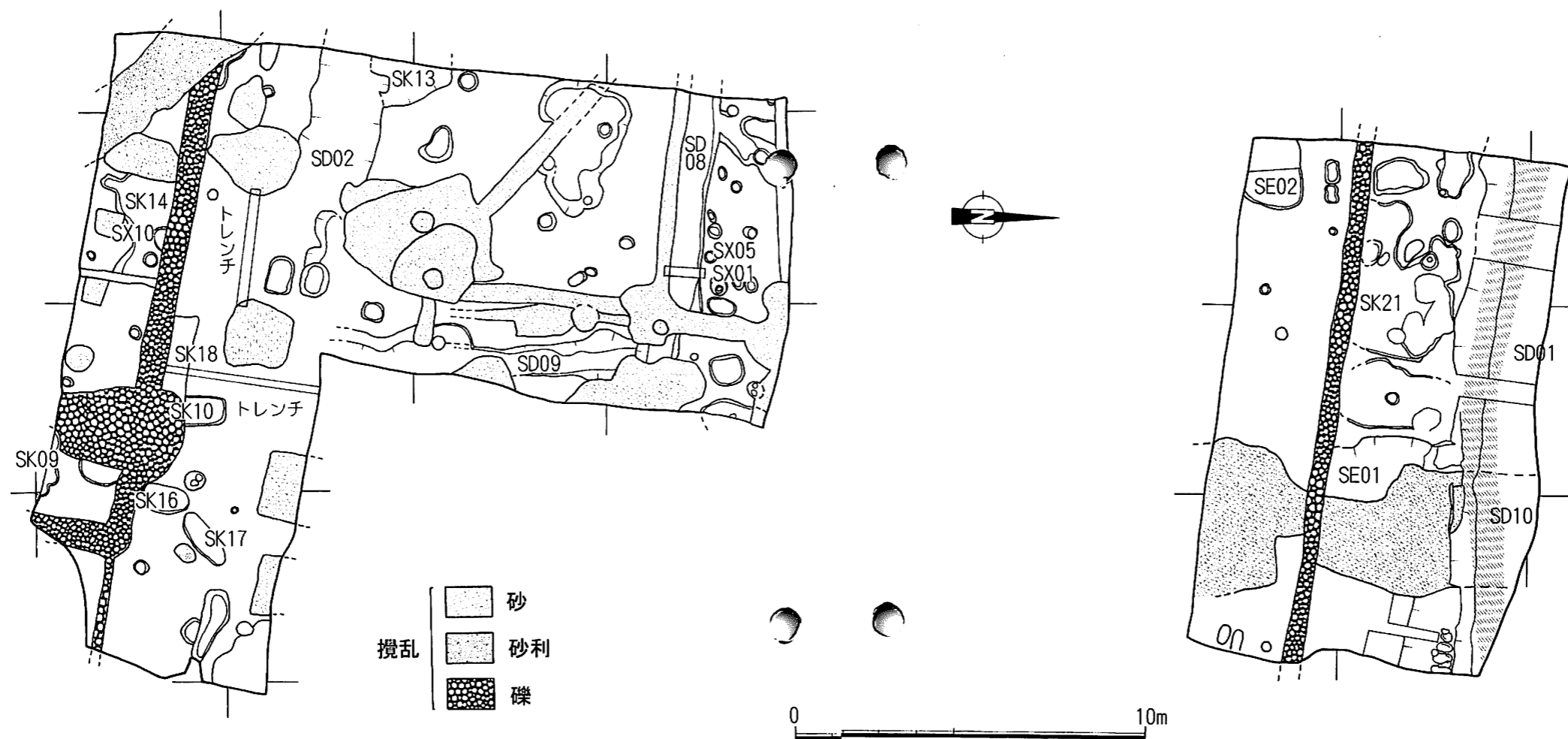
土師器鍋 (075) …口縁部が大きく開く浅手の鍋である。

短頸壺(078～081)…高台が垂直(079)に取り付くものと、短くハの字(080・081)に広がるものがある。外面はヘラミガキが施され、内面はヨコナデである。

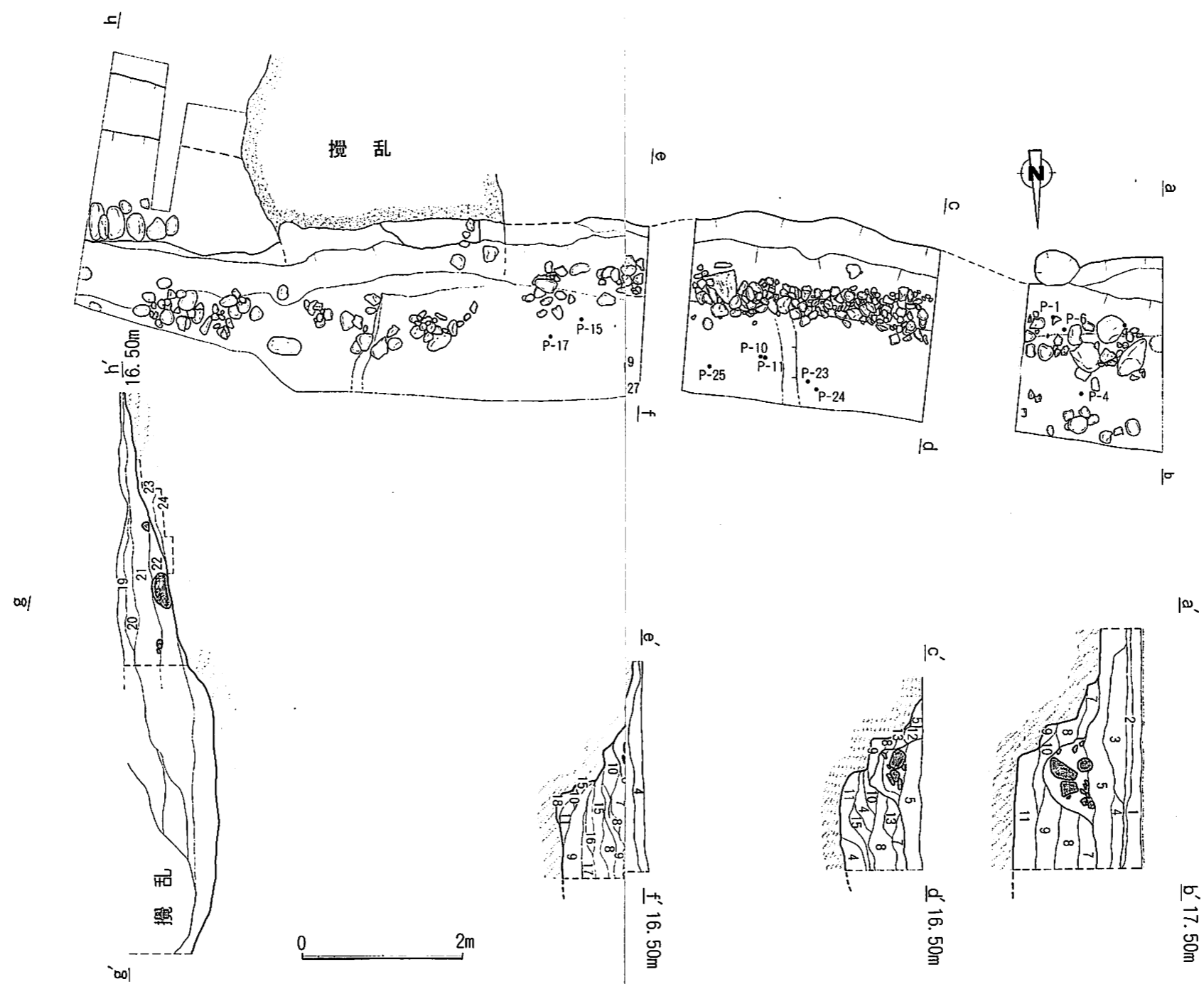
緑釉陶器 (092～093)

(092)…復元口縁径からすれば、碗になろう。口唇部で短く外反する。胎土は軟質である

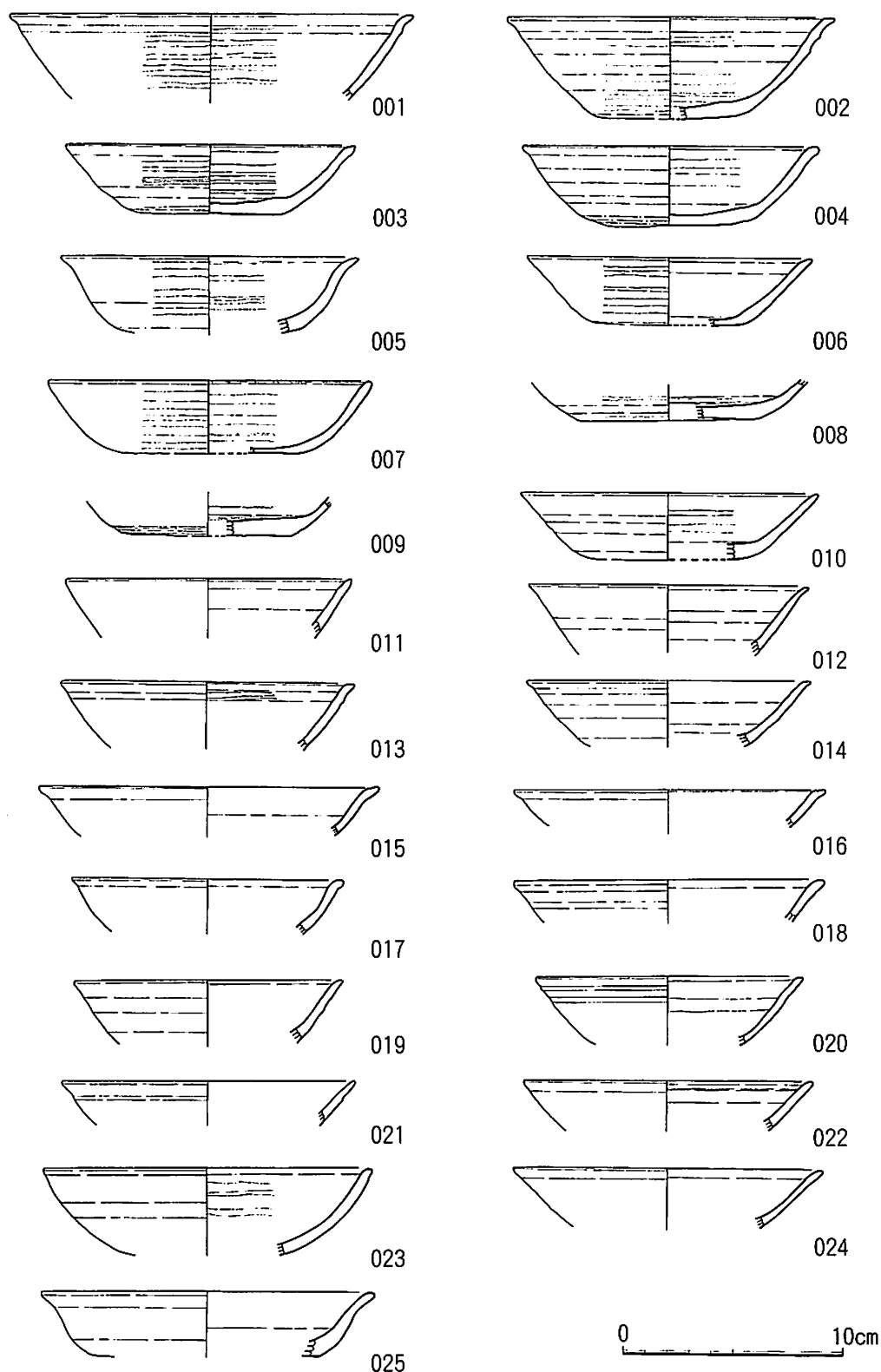
(093)…円盤状高台を呈し、底部は糸切りである。胎土は軟質である。こうした特徴から9世紀前半から中葉に年代を置ける。



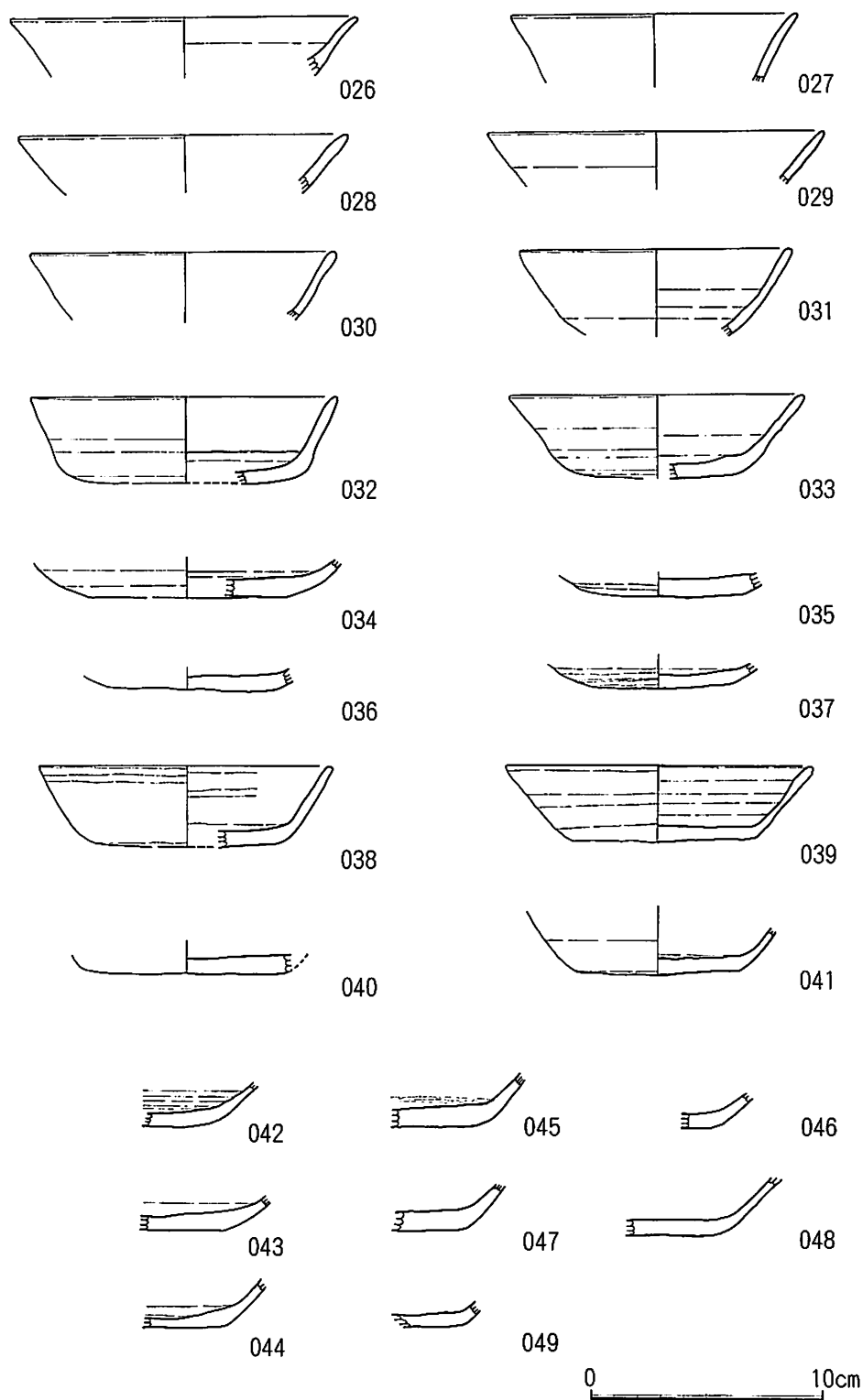
第4図 賀来中学校遺跡 溝配置図 (1/160)



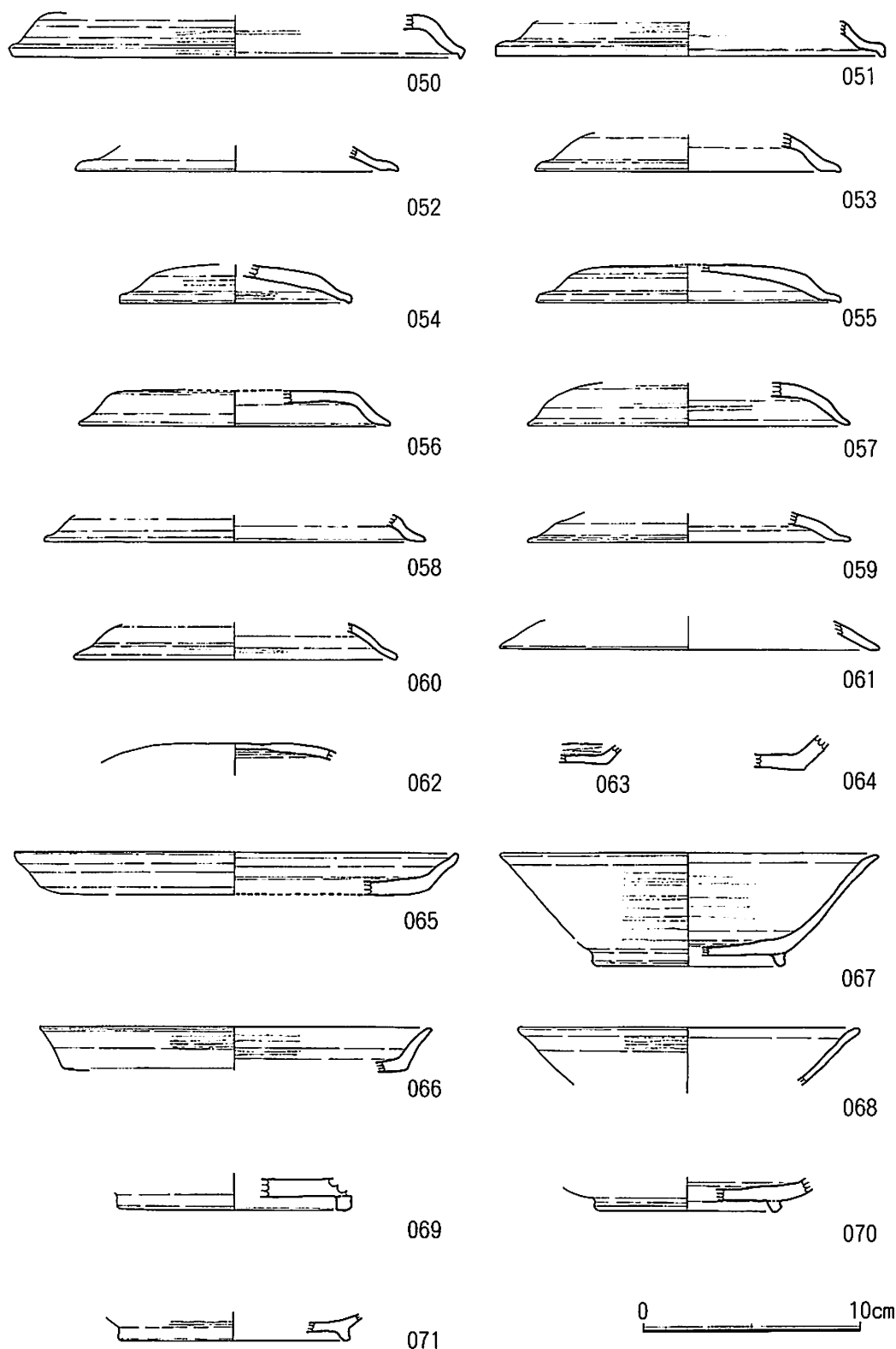
第5図 SD01 平面図断面図(1/60)



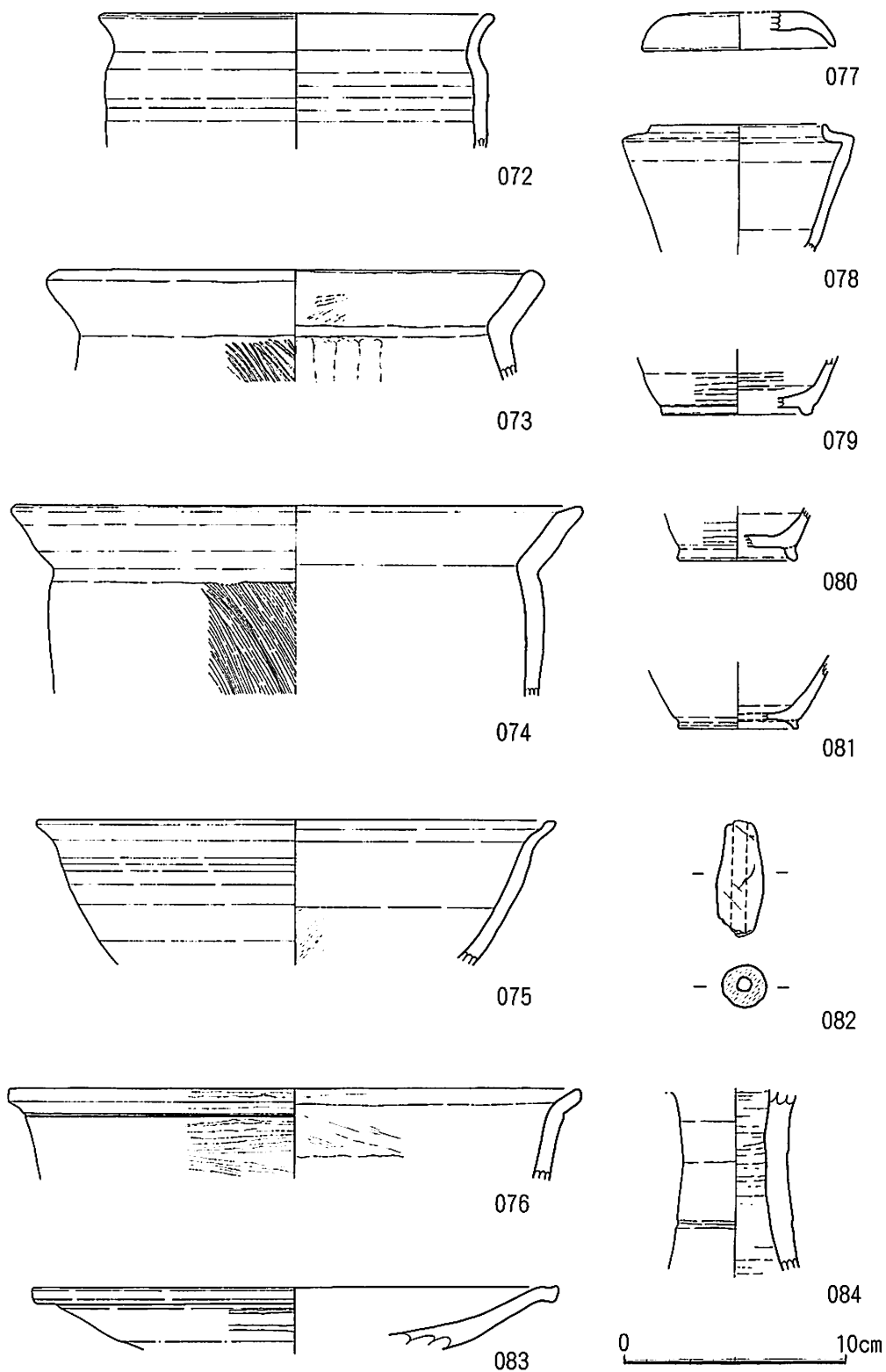
第6図 SD01 出土遺物① (1/3)



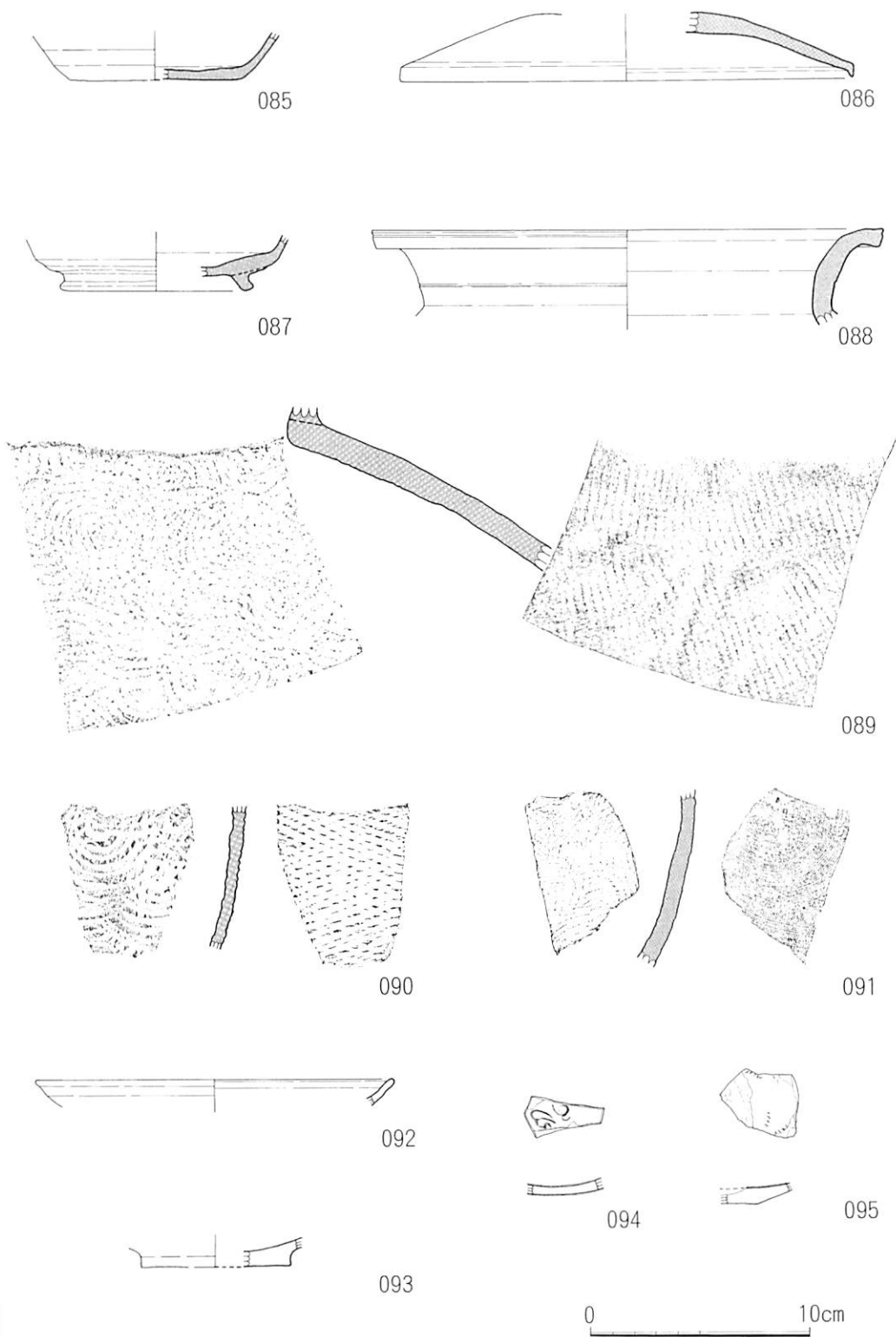
第7図 SD01 出土遺物② (1/3)



第 8 図 SD01 出土遺物③ (1/3)



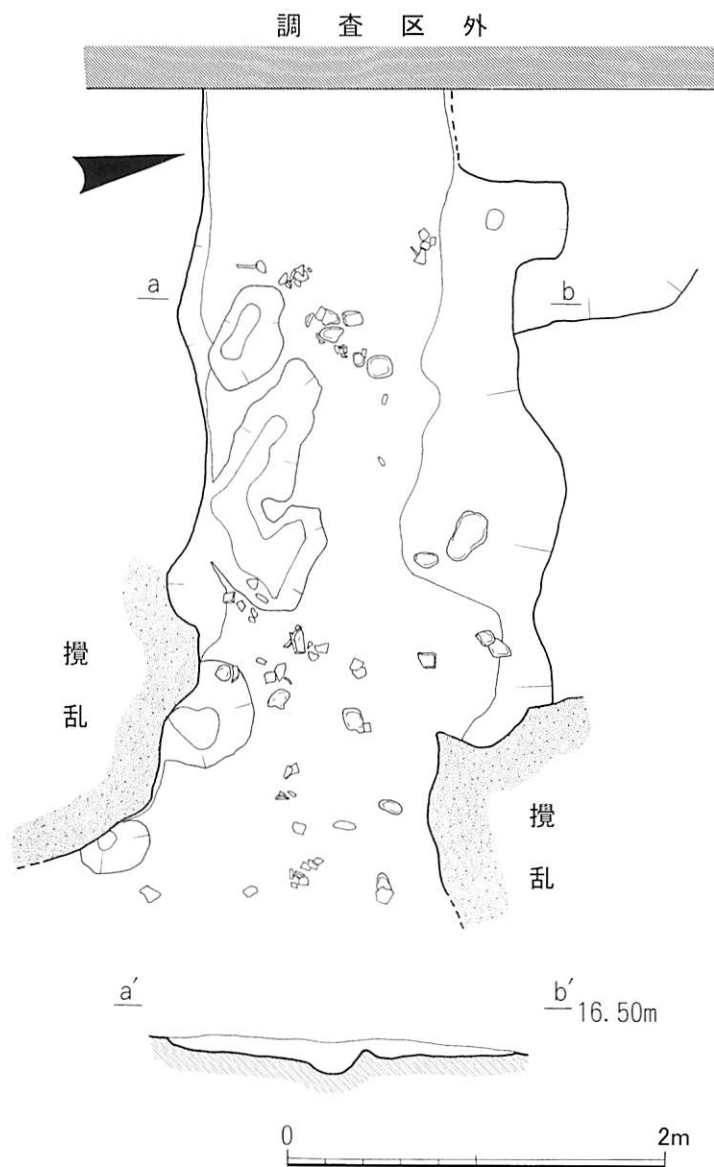
第9图 SD01 出土遺物④ (1/3)



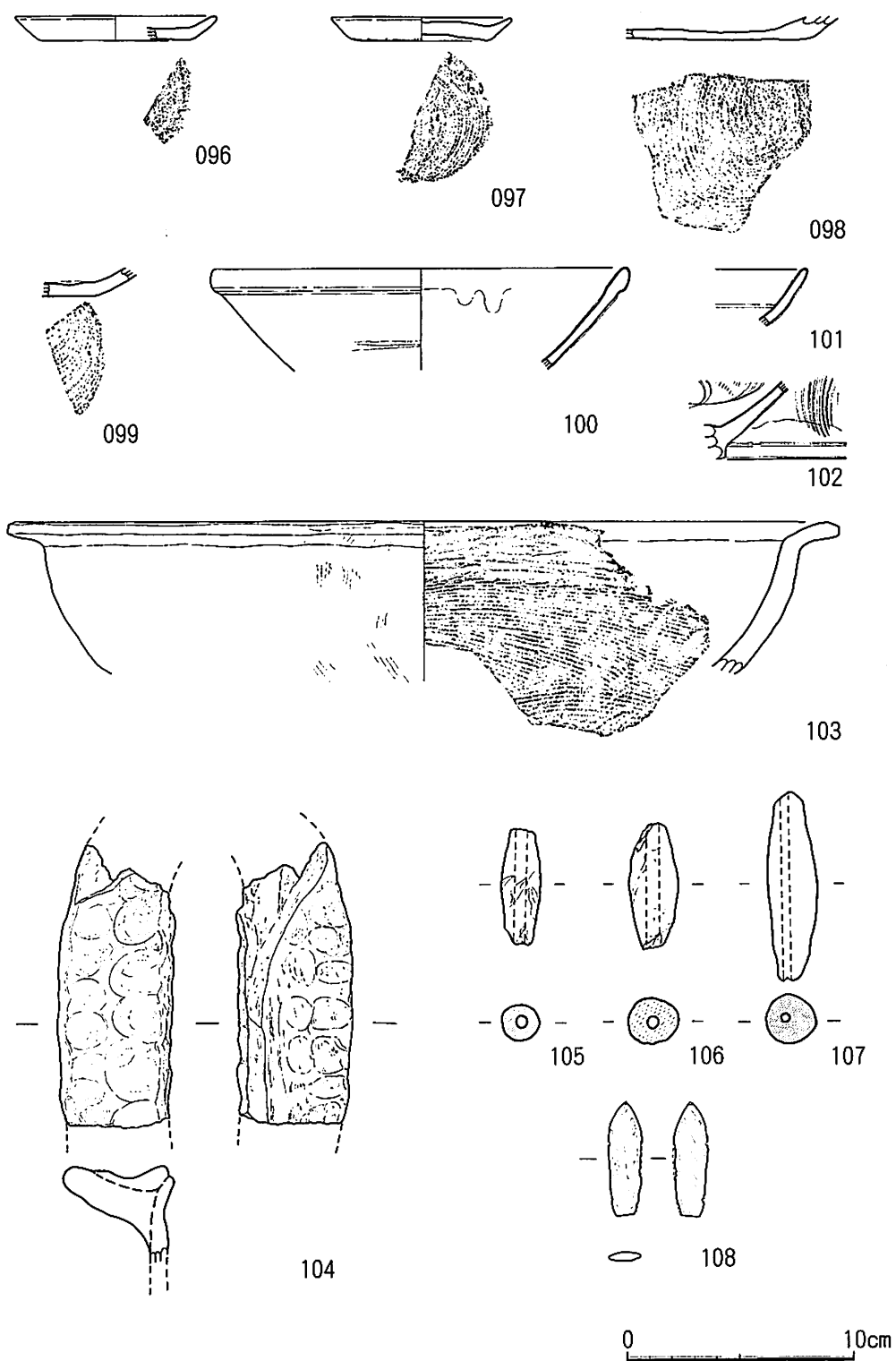
第 10 図 SD01 出土遺物⑤ (1/3)

2号溝 (SD02)

SD02は南側調査区において東西方向に走る溝状遺構である。西側は調査区外に延び、東側は攪乱等により次第に消滅していく。幅は最大で1.8mを有し、深さは5～6mである。かなり上面が削平されたものと思われる。溝内部からは、弥生土器片、須恵器片、土師質土器の小皿・坏・竈、白磁、青磁、土錘、磨製石鏃等が出土している。出土遺物から中心的時期は12世紀中葉から13世紀前半になり、埋没年代は13世紀前半代に相当されよう。



第11図 SD02 平面・断面図 (1/20)



第 12 図 SD02 出土遺物 (1/3、105～108 は 1/2)

出土遺物

土師質土器小皿（096・097）…口径 10cm 以下のもので、口縁部は斜め上方に開いている。伐株山城跡皿 AⅠ類と類似していることから、13世紀代のものであろう。

土師質土器坏（098・099）…回転系切り底である。器形が大きい。

輸入陶磁器（100～102）

（100）…白磁碗。口縁部は玉縁となっている。高台の部分が欠損して全体像は分からないものの、体部が直線的で全体に薄く釉が施されている点から、白磁Ⅳ類に相当する。

（101）…同安窯系の青磁碗。色調が黄緑色に近く、口縁部が内彎し、体部中位で屈曲することからⅠ-1類に相当する。

（102）…同安窯系の青磁碗。内面には施紋、外面には櫛目を有する。同安窯系の青磁碗のⅠ-1-b類に相当する。

土師質土器

（103）…鍋型土器。外面、内面に刷毛目が施されている。形状は底の部分が浅く、丸底になっている。色調は、明黄白色であり、瓦質焼成に変化している。これらの特徴や口縁端面が、ほぼ垂直に立っている点、13世紀前半に土師質から第一段階の瓦質に変化する時期にあたることから、谷口俊治氏による鍋AⅢ類と類似する。このため、時期は13世紀前半のものと思われる。

（104）…移動式の竈であり、大分市内では下郡遺跡・横尾遺跡に次いで3例目となっている。

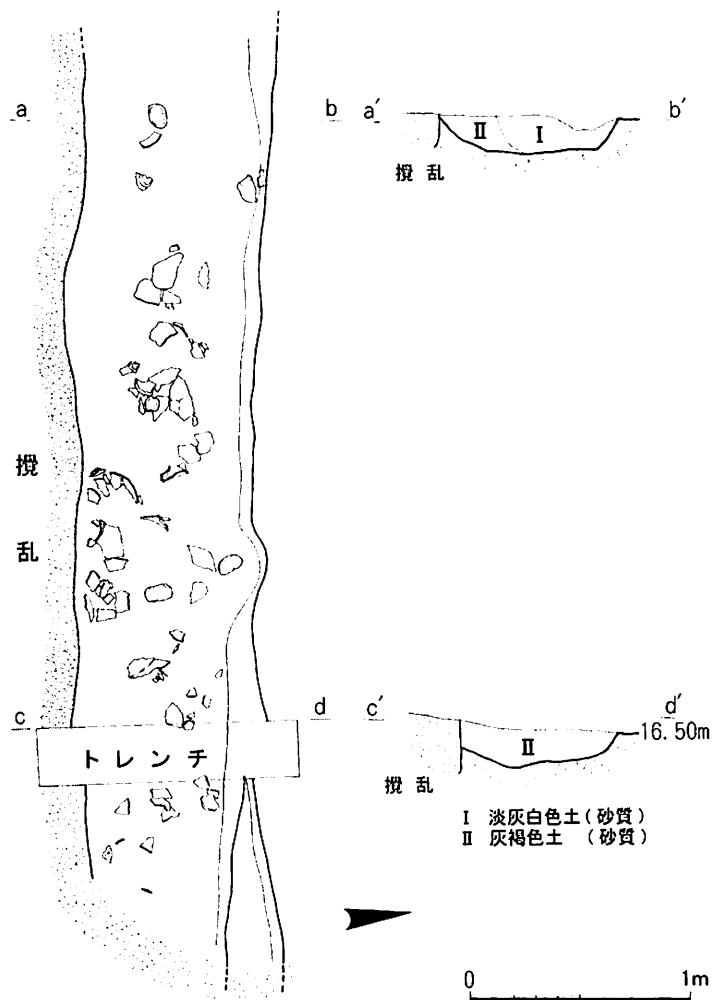
土錘（105～107）…5～6cm 大の土錘（105・106）と 8cm 大の土錘（107）の大小の2タイプが見られる。

磨製石鏃（108）…平基式の磨製石鏃。長さは 4.9cm、重さ 4.2g あり、大形である。特徴から弥生時代後期から古墳初頭に属する。

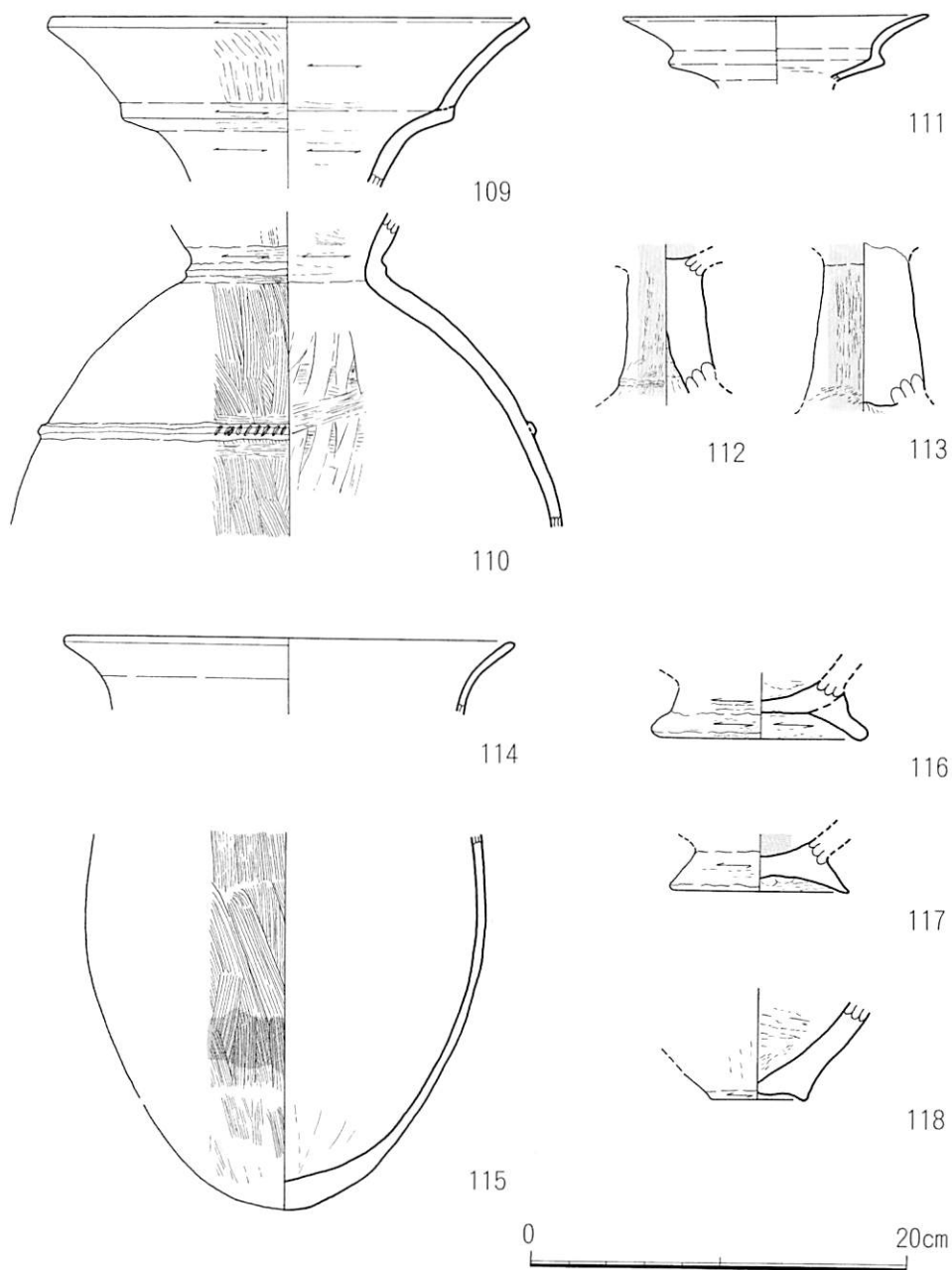
8号溝 (SD08)

SD08 は南側調査区の北において東西に走る溝状遺構である。

遺構の西側は調査区外へと延び、東側は攪乱を受けながらやはり調査区外に走っている。さらに、南側にも近年における水道管の埋設された幅 40 cm の方形の掘り方が東西方向に平行して走り、SD08 を削っている。そうしたことから正確な遺構の幅は分からないが、現状より復元すれば約 80 cm となろう。深さは、検出面から 15 cm を有し、掘り方は逆台形を成している。溝内より、古式土師器の甕・壺・高坏、台付鉢等が出土した。上面がかなり削平されているらしく、遺物の中に完形となり得る個体は見られない。なお、土器の中には外面刷毛目調整を施し、内面にヘラケズリが見られ、器壁が 3 mm と極めて薄く仕上げられているものがある。



第 13 図 SD08 平面・断面図 (1/3)



第 14 图 SD08 出土遺物 (1/4)

出土遺物

壺 (109 ~ 110)

(109) …浜遺跡の第3号石棺第1土器群の壺と類似する、いわゆる「茶臼山タイプ」の壺の形態を呈する。このタイプの壺は複合口縁部の頸部が直線的に立ち上がって水平に張り出すのに比べ、この土器は頸部が大きく緩やかに外反している。なお、口縁部には波状文は施されていない。土器編年は様式Ⅰb式の庄内系土器群併行期にあたり、時期年代は3世紀後半になる。

(110) …在地系弥生土器の系譜のたどれる複合口縁壺である。形態は長胴丸底を呈し、中位に胴部の最大径をもっている。頸部と胴部の境に退化した三角突帯が1条巡る。ベルト状突帯文の位置は中央より上位に巡り、断面は台形を成しキザミを施す。外面は刷毛目、内面はヨコ方向に刷毛目調整をおこなった後、タテ方向にナデ消しを施している。突帯の位置が上位にあることからやはり様式Ⅰb式にあたる。

高坏 (111 ~ 113)

(111) …口径は復元径16.2cmと小型である。口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。口縁部と坏体部との接合部は中位よりやや下位にあり、明瞭な段を有する。

(112) …上下の径に差が見られず、長く伸びる脚柱部であり、裾部はラップ状に開くものと思われる。脚柱部と裾部との境には稜を有する。

(113) …脚柱部の上に比べ、下の径がやや広がり、裾部がラップ状に開くであろう。

甕 (114・115)

(114) …在地系土器「く」の字状に口縁部が外反する。肥厚せず厚さは一定である。

(115) …形態は長胴丸底を呈する。外面には刷毛目が見られるが、内面はナデ調整である。

台付鉢 (116 ~ 118)

(116・117) …小さな「ハ」の字に開く脚がつく。

(118) …上げ底状の底部を有する。

9号溝 (SD09)

SD09は南側調査区の北側を南北方向に走る溝状遺構である。

北側はSD08と切り合い、南側は攪乱を受けながら調査区外へ延びている。

溝の幅は0.8～1.3m、深さは検出面より5.5～8.5cmを有する。

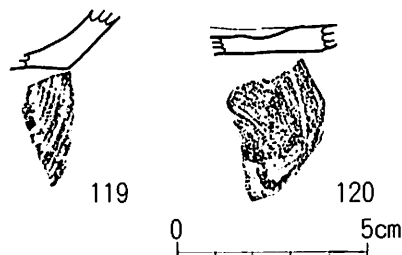
出土遺物は少量で、糸切り底の土師質土器坏(119・120)が見られる。

10号溝 (SD10)

SD10は北側調査区の北寄りを東西方向に延びる溝状遺構であり、SD01のほぼ内側に掘り込まれている。SD01と同一方向でなおかつ内側に掘削が行われているため、平面での検出は不可能であったが、断面観察によりSD01の埋没後に新たに掘削されたものであることが確かめられた。

溝の規模は、幅1m程、深さは西側で60cm、東側で25cmを有し、掘り方はU型を成している。

遺構内には大きいもので人頭大のものから拳大の



第15図 SD09 出土遺物 (1/2)

ものまで多数の河原石が混入している。特に西側では石が密に詰まっており大きなものも見られるが、東側に行くに従って石は小さくなり量もまばらになっている。流水方向は、西から東方向である。

出土遺物は石列に混ざって備前産の摺鉢（121・122・123）・甕（124）、磁器碗（125）等が見られた。

出土遺物

摺鉢

（121）…備前産の摺鉢。口縁部が垂直近く立ち上がり、口唇部が稜をもって先端を角張らせる。外面の口縁には2条の沈線が巡っている。こうした特徴から備前焼第Ⅴ期に属するものであることから、16世紀を中心とするものであろう。

（122）…備前産の摺鉢。器胴にはロクロ整形痕によってできた凹凸が見られる。内面の櫛目は1単位13本である。

染付け碗

（125）…明代（16世紀代）の染付碗。内面に見られるアラベスク文様は鮮やかな青の色調を呈し、一筆で描かれている。高台は細くて高い。

2. 土坑（SK）

今回の調査においては、20基の土坑を確認した。

9号土坑（SK09）

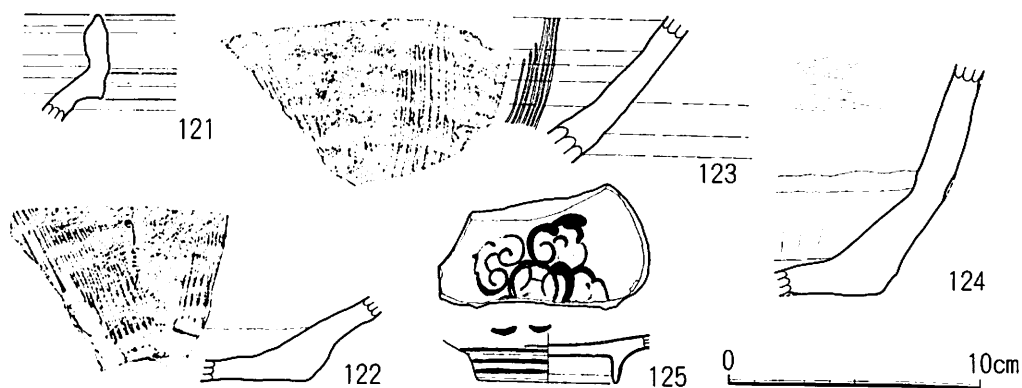
H-2区で検出された不整形の土坑である。

遺構の深さは、検出面から6cmを有する。

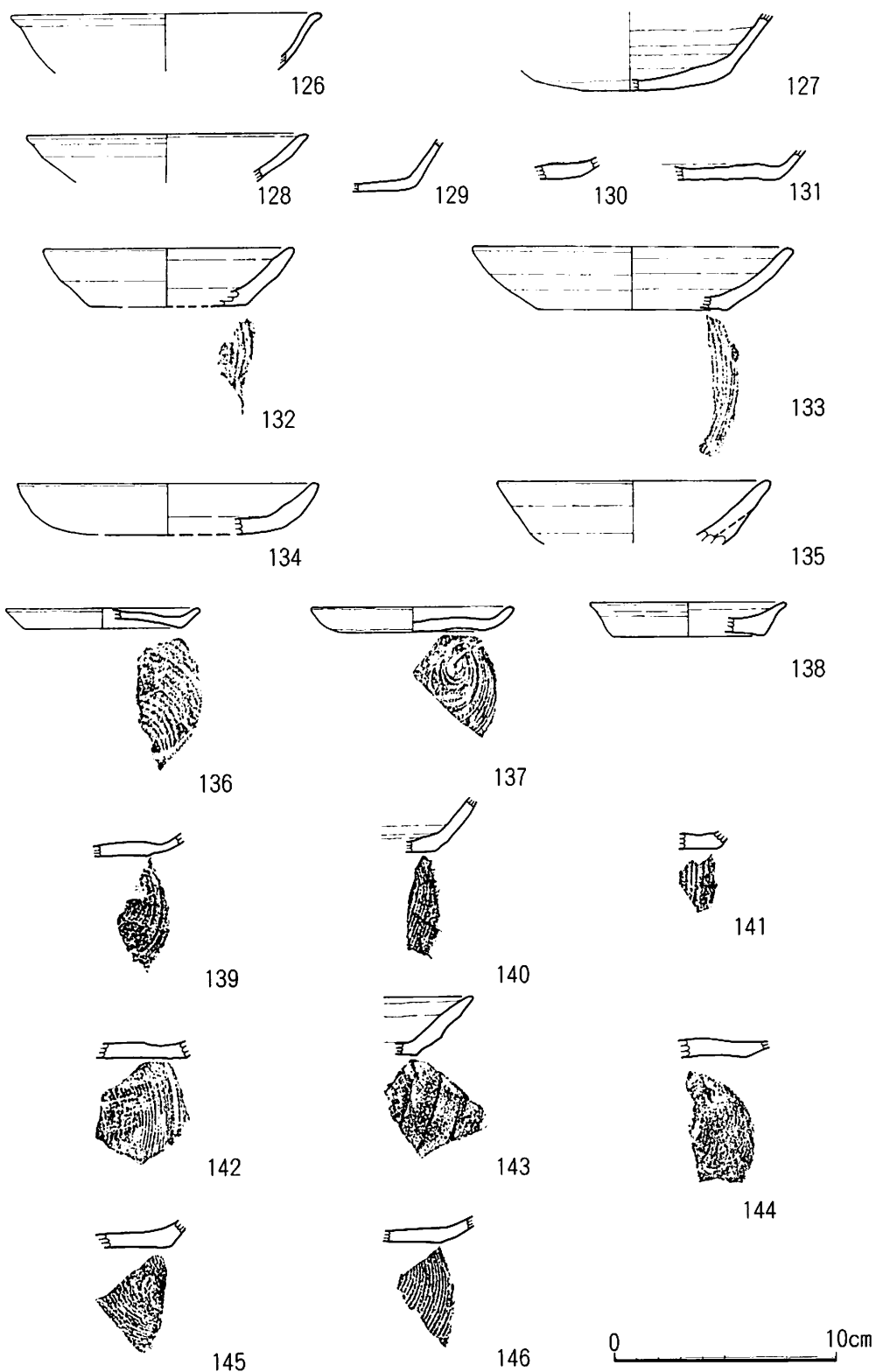
埋土内より、土師器坏（126・129）・蓋（147）・椀（152）が出土している。

出土遺物

土師器碗（152）…外面ヘラミガキ、内面はヨコナデを施す。高台は体部と底部の境に見られ、外方に張り出す。SD01の椀a類にあたる。



第16図 SD10 出土遺物（1/3）



第 17 図 SK 出土遺物① (1/3)

10号土坑 (SK10)

H-2区で検出された隅丸長方形の土坑である。

長軸は南側において攪乱により知ることはできないが、幅は80cmを有する。深さは検出面から7～8cm程度である。

埋土内より回転糸切り底の土師質土器坏(132・139・140)、弥生土器高坏(151)・高台付坏(153)、須恵器の長頸壺(154)、青磁碗(157)が出土している。

出土遺物

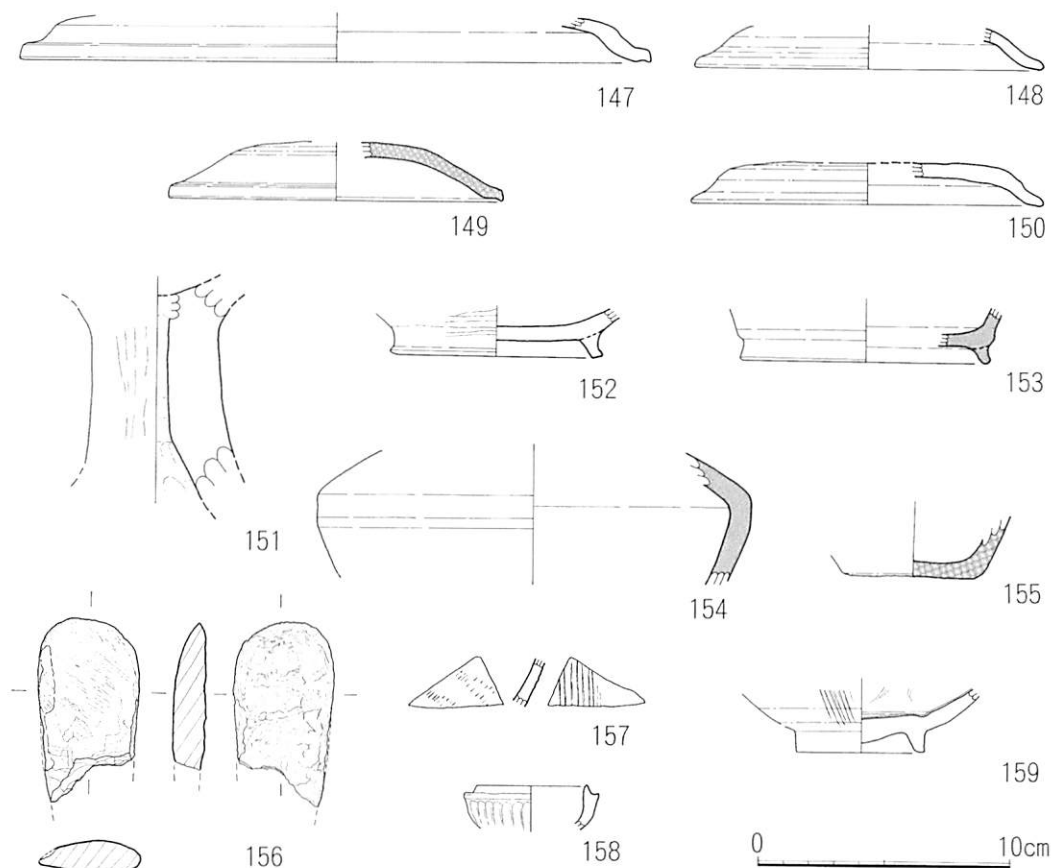
土師質土器坏(132) …平坦な底部から外上方へ立ち上がり底部、体部と共に厚手である。体部にロクロ成形時の凸凹が見られる。伐株山遺跡(坏AⅣ)のものと類似する。

輸入陶磁器(157) …同安窯系の青磁碗である。外面には細かい櫛目を有する。特徴から I - 1 - b類に相当する。

13号土坑 (SK13)

G-0区で検出された円形状の土坑である。西側は調査区外に延び、さらにSD02に切られている。

土坑内より、糸切り底の土師質土器坏(135・141)が出土している。



第18図 SK 出土遺物② (1/3)

15号土坑 (SK15)

輸入陶磁器 (158) …青白磁合子。兵庫県江ノ上経塚出土の白磁合子と酷似しており、12世紀後半から13世紀前半の年代に比定されている。

21号土坑 (SK21)

A-1区で検出された不整形の土坑である。

埋土は、茶褐色土層と灰茶色土層の2層から成る。

土坑内より、土師器の坏 (128)・蓋 (150)、須恵器の蓋 (149)・把手付碗鉢 (155) が見られる。

出土遺物

須恵器蓋 (149) …口縁端部で屈曲し、くちばし状の口唇部を呈する。

土師器蓋 (150) …天井部は平らで、回転ヘラケズリを施す。口縁端部で屈曲し、丸みのあるくちばし状の口唇部を呈する。SDO1の蓋b類にあたる。

3. 井戸跡 (SE)

北側調査区で2基確認された。

1号井戸跡 (SE01)

SE01は北側調査区のA-2区に位置する井戸跡である。

遺構の東側は旧体育館の基礎によって攪乱されている。このため、性格な規模を把握することはできないが、南北長は約2.8mを有する。

掘り方は北側部分で一段のテラスを有し、摺鉢状の形状を成す。

埋土層は幾重にも見られ、検出面より50～100cm下部において長さ10～30cm大の河原石が投棄されており、埋める時に埋土部分が沈まないように配慮したものである。

埋土内からの出土土器は希少であり、磁器碗 (160) 等が見られるにすぎない。

出土遺物

輸入陶磁器 (157) …景德鎮窯系の蓮子碗。口縁部外面には波濤文、内面外面は界線が2本巡っている。年代は15世紀後半～16世紀中頃であろう。

2号井戸跡 (SE02)

SE02は北側調査区のA-1区に位置する井戸跡である。

埋土上層から人頭大の角礫が出土した。遺物には染付碗が見られた。

出土遺物

染付碗 (161) …明代 (16世紀代) の染付碗。外面の口縁部には2条の下界線が巡り、体部には唐草文が密に見られる。内面の口縁部にも2条の下界線が巡っている。文様は鮮やかな青の色調を成し、一筆で描かれている。

4. 柱穴遺構 (SX)

柱穴遺構は数十ヶ所で検出されているが、この内近代の基礎に伴う攪乱が3分の1以上を占める。ここでは、主なものを取り上げる事にする。

SX01

E-1区に位置し、やや楕円形の形状を成す。

規模は長軸50cm、短軸30cmを有する。

底部には直径12cm大の浅い円形の掘り込みが2ヶ所見られる。

埋土からは、弥生終末～古墳初頭の土器片が出土している他、緑釉陶器(162)が1点見られる。

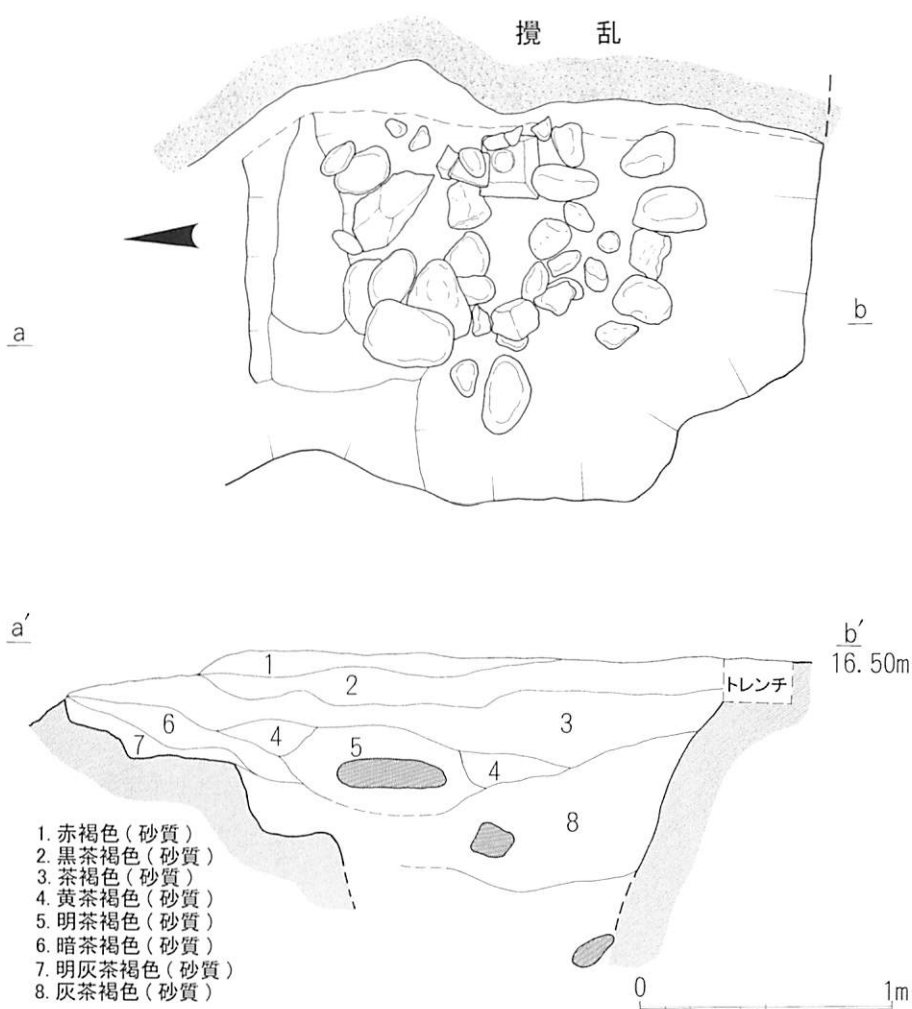
出土遺物

緑釉陶器(162)…高台は輪状に削り出している。底部外面に施釉は見られない。胎土は硬質である。輪高台になっている点や底部外面の施釉が省略されていることから9世紀後半から10世紀に相当される。

SX05

E-1区に位置し、円形の形状を成す。

規模は直径約40cm、深さ20cmを有する。弥生時代終末から古墳時代初頭の壺の底部(163)



第19図 SE01 平面・断面図 (1/30)

が出土している。

出土遺物

壺 (163) …丸底を呈し、内面には刷毛目が見られる。

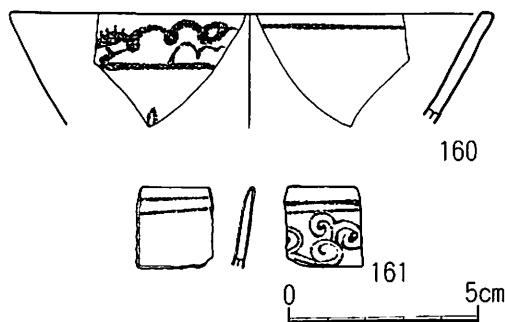
SX10

H-1区に位置し、円形の形状を成すものと思われる。

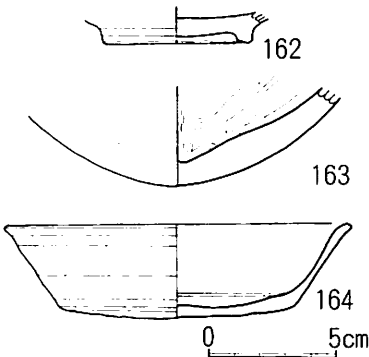
出土遺物に、土師器の坏 (164) が1点出土している。

出土遺物

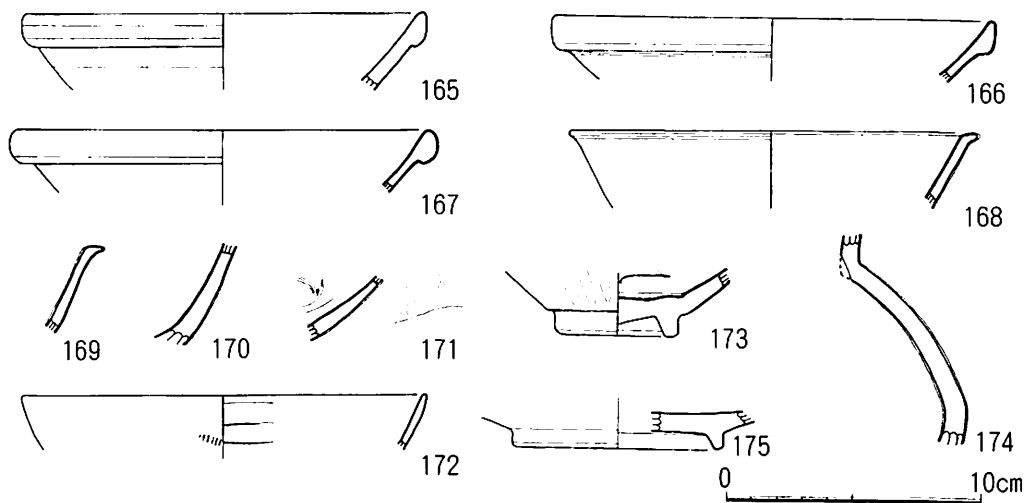
土師器坏 (164) …口唇部がやや外反し、底部は回転ヘラ切り後ナデを施している。



第 20 図 SE 出土遺物 (1/2)



第 21 図 SX 出土遺物 (1/3)



第 22 図 その他の出土遺物 (1/3)

5. その他の遺物

遺構に伴うもの以外に多数の白磁、青磁、緑釉陶器が出土した。

白磁

(165・166・167) …小さな玉縁状の口縁を呈する。特徴から白磁碗Ⅳ類にあたる。

(168・169) …体部は、直線的に外上方に延び、口縁部は外反する。特徴から白磁碗Ⅴ - 4 - a類にあたる。

(174) …白磁の四耳壺。特徴からⅢ類系に分類される。

青磁

(170) …龍泉窯系の碗Ⅱ - 1類に相当する。

(171) …同安窯系の碗Ⅰ - 1 - b類に相当する。外面には細かい櫛目を有する。

(172) …同安窯系の碗Ⅰ - 1 - b類に相当する。

(173) …同安窯系の碗Ⅰ - 1 - b類に相当する。台形状の厚い高台を有し、底部の器肉は厚い。

緑釉陶器

(175) …底部に三角高台が貼り付けられている。全面に施釉がおこなわれている。胎土は比較的軟質である。

第4章 まとめ

第1節 SD01（1号溝状遺構）の遺物の年代について

以下に各遺構の帰属年代を出土遺物より検討していきたい。

[SD01]

土師器の土器編年については、豊前地域を中心としたもの、弥勒寺を中心に呈示されたものがあり、その成果を基に各遺物の年代の位置付けをおこなった。

（土師器坏）

賀来中学校遺跡から出土した中で調整を中心に3類に分類したが、単純にヘラミガキの有無もしくは粗密及び底部の回転ヘラ切りの出現が坏の変化と対応するか、認めがたい所がある。このため、各形態の年代比定は今後の調査に委ねる事にした。

賀来中学校遺跡のⅠ類は弥勒寺SD-7の坏A2に類似し、Ⅱ類は坏A3・Cと類似している。Ⅲ類は弥勒寺SK-2と比較して、形態的にこれより後出する事はない。

よって、賀来中学校遺跡出土の坏は8世紀中頃から9世紀中葉の間におさめることができる。

（土師器碗）

碗のa類は、弥勒寺SD-7出土のものと類似し、B類・C類は、弥勒寺坏Bにあたる。よって年代は8世紀中頃から後半に比定される。

（須恵器）

蓋（086）は口縁部内側に返しをもつもので、天井部から口縁部に向かって直線的である。口縁端部の形態は、新しくなるに従い、屈曲したくちばし状を呈するものに変化する事から、8世紀後半には至らないであろう。

碗（087）は底部と体部の境よりも内側に高台が付いており、8世紀後半代に見られるような高台の位置が外に寄ったものよりも古相を呈する。

以上のような各遺物の検討より、SD01の埋没は遅くとも9世紀前半から中葉に比定されよう。

第2節 各遺構の変遷

賀来中学校遺跡で検出された遺構の年代に従って分類すると大きく4時期に遺構の形成が見られる。追って遺跡の変遷を見ていきたい。

[Ⅰ期] …弥生時代終末～古墳時代初頭

遺構…SD08・SX05

[Ⅱ期] …奈良時代後期～平安時代前期

遺構…SD01・SK09・SK14・SK21・SX10

[Ⅲ期] …平安時代後期～鎌倉時代前期

遺構…SD02・SK10・SK13・SK15・SK19

[Ⅳ期] …桃山時代～江戸時代初期

遺構…SD10・SE01

以上に見られる様に、これまで賀来中学校遺跡（1次～3次）の調査で検出された弥生時代

後期の遺構及びこれに伴う遺物は見当たらない。

まずⅠ期の時期についてはⅠ次調査のⅡ号溝と住居跡がこれに当たり、今回調査でのⅧ号溝と柱穴遺構（S X 05）に相当する。Ⅷ号溝はⅡ号溝に見られる環濠の性格を持ったV字溝とは異なり、非常に規模の小さなものである。さらに、掘り方の形態が逆台形を示し、出土遺物に複合口縁の壺が出土していることから方形周溝墓と類似しているものの遺構の全体像を確認できなかったため遺構の用途は不明である。

Ⅱ期の時期はこれまで周辺では遺構の確認はされておらず、今回のⅠ号溝と数基の土壙が初めての該当である。Ⅰ号溝は東西方向に延び東側は大分川に直交するように向かっている。床面が東方向に下がっているため、溝内に水があれば大分川へと注いだであろう。ただ、現大分川の水位と溝の床面とに大きな比高差が見られることから、大分川の手前で段差が見られるものと思われる。

Ⅲ期は青磁や白磁を伴うⅡ号溝や数基の土坑が見られる。Ⅱ号溝は上面の削平が著しいため遺構の残りは非常に良くない。したがって、遺構の性格として溝となるかどうか判断しがたいが、ここでは溝としてあつかった。

Ⅳ期はⅠ0号溝とⅠ号井戸跡が見られる。Ⅰ0号溝はほぼⅠ号溝と同一の場所に重なって走っている。Ⅱ期にⅠ号溝が造られ、さらにⅣ期にⅠ0号溝が同じ場所を掘削していることは偶然とは考えられない。おそらく、なんらかの要因がこの場所に溝を切ることにつながったものと考えられる。たとえば現在と言う字境なるものがこの場所にあたり、そのために溝がその境となったのであろう。

第3節 まとめ

以上、賀来中学校遺跡の遺構により断続的にこの地に遺跡が形成されてきた様子が窺える。

Ⅰ期にあたるⅧ号溝などの遺構と過去に調査した賀来遺跡出土の遺構を挙げると、昭和55年に行われた調査で検出されたS D 02、S H 08・14・24・33がこれに該当する。S D 02はその延びから集落を囲む溝であろうと考えられる。溝の東側に同時期の住居跡が多数見つかっていることから、大分川に向かって半円状に延びていることが示唆できる。したがってその溝が今回調査をおこなった第4次調査で検出されたS D 08とつながる可能性もあるが、溝の床面の形態や遺物の組成からすれば異なる要素があり、同一のものとは考えられない。さらに、第4次調査と第1次調査の真ん中あたりに南北方向に道が現在通っているが、これを境に地面の高さが東側に一段低くなっている。これは、旧地形の面影を残しているものとして、これが河岸段丘面にあたることが示唆される。したがって、第1次調査で確認された集落およびそれを囲む溝は現在の道辺りを範囲とするものであったと考えることができよう。一方、第4次調査の場所は低いところにあり、集落外にあったものと考えられる。そうするとこの場所が集落に関連した施設を想定することができ、Ⅷ号溝からⅡ重口縁の壺や高坏等が出土していることから墓域にあたるのではないかとと思われる。

Ⅱ期にあたる時期はこれまでの周辺調査を含めて第4次調査で発見されたⅧ号溝と数基の土壙しか見つかっていない。したがってこの時期には集落の様な遺跡は形成されずに、局部的に使用したものであろう。今回建物等が発見されていないため、溝と土壙がどのような性格であったか不明な点が多い。ただ8世紀の中葉以降には、既に国分に国分寺が建立しており、距離にして1

kmの地点にあたる。さらに豊後国府の推定地である古国府まで距離にして4 kmの位置にあり、国府と国分寺を結ぶルート上に位置している。仮に国府から国分寺に行くとすれば、まずは永興～賀来を経て、賀来川ないし大分川を渡らなければならない。そして賀来～国分へと辿ることができ、賀来遺跡が所在する場所を通ることになる。さらにこの地は賀来川と大分川が交わる場所でもあり賀来川は川幅も狭く交通の行き来には良好の場所となっている。

以上のことから、賀来遺跡の地は国府から国分寺につながる交通の要所としてとらえることができるのではないかと考えられる。出土遺物に越州窯系の碗が見られることから、それが豊後国衙の高坂駅と速見郡の由布駅とをつなぐ官道（太宰府道）が賀来の条里の中を走っていたとすればこれに関連した遺跡であると思われる。したがって今回検出された1号溝や土坑はそうした施設に付随する遺構であると考えることができよう。

Ⅲ期といえば賀来荘が成立（12世紀前半頃）した時期に相当する。遺構としては、賀来荘につながるような遺構は確認されなかったが、青磁や白磁の碗、青白磁合子など特記すべき遺物が出土しており、賀来氏の存在を裏付ける資料と言えよう。

Ⅳ期は、井戸並びに溝状遺構が検出するなど集落的な要素が見出される。遺物においても播鉢が見られるが、井戸跡からは中国製の染付碗が出土している。これまで周辺部での調査では、14世紀後半～15世紀後半にあたる幅4 mを超える溝状遺構が見つかったものの、同時期の遺構は確認されていない。今回、Ⅳ期に相当する遺構は、賀来氏から大友氏の家臣としてこの地に経済的基盤を継続させていった家臣団層の館に相当する可能性もあり注目される。

Ⅰ期からⅣ期まで各時代において遺跡が形成されていることや輸入陶磁器を多く含む遺構が各時代から確認されることから、賀来氏に関連する館などの存在も示唆されるところである。また、この場所が遺跡を形成するのに好条件な場所であり、立地的にも大分川とその支流である賀来川の接点ということもあって交通の要所ともなっており、今後の周辺部において更なる調査成果が期待される。

<参考文献>

高橋徹 1979 「廃棄された鏡片 ―豊後における弥生時代の終焉―」『古文化談叢第6集』九州古文化研究会

1989 『弥勒寺 宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

1983 『楠野 大分県竹田市所在遺跡発掘調査報告書 大分県文化財調査報告第63輯』大分県教育委員会

1989 『安国寺遺跡 大分県・国東町文化財調査報告書第4集』国東町教育委員会
間壁忠彦昭和52「備前」『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館

坪根伸也 1992 『賀来中学校遺跡』大分市教育委員会

表2 遺物観察表①

遺物 番号	坪区 番号	出土区 遺構名	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混 和 材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面	口 徑	器 高	胴 部 最大径	底 径	
001	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 角閃石 赤色酸化土粒	細粒	淡黄白色	明赤黄色	ミガキ	ミガキ	(18.4)	-	-	-	反転復元
002	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 石英 赤色酸化土粒	微粒	淡赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ 一部ミガキ	回転ヨコナデ後 ミガキ	(15.0)	4.5	-	(6.8)	底部ヘラ削り後ミガキ 反転復元
003	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 石英 赤色酸化土粒	微粒	明赤黄色	淡黄褐色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	13.2	3.1	-	7.2	底部回転ヘラ削り
004	6	SD01	土師器 杯	石英 赤色酸化土粒	細粒	明赤茶色	明赤黄色	回転ヨコナデ (口縁部) ミガキ	回転ヨコナデ	13.6	3.7	-	8.0	底部回転ヘラ削り
005	6	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤茶色	淡赤茶色	ミガキ	ミガキ	(13.6)	-	-	-	反転復元 底部回転ヘラ削り
006	6	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ヨコナデ (口縁部) ミガキ	ミガキ	(13.0)	(3.0)	-	(7.0)	底部ヘラ削り後ミガキ 反転復元
007	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	明赤茶色	暗赤褐色	回転ヨコミガキ 不定方向ナデ	回転ヨコミガキ	(11.8)	3.3	-	(7.8)	底部回転ヘラ削り 反転復元
008	6	SD01	土師器 杯	長石 角閃石	微粒	明赤黄色	淡黄白色	ミガキ	ミガキ	-	-	-	(8.2)	底部ヘラ削り 反転復元
009	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 長石 赤色酸化土粒	細粒	明赤茶色	赤茶色	一定方向のナデ 後ミガキ	回転ヨコナデ	-	-	-	(7.8)	底部ヘラ切り離した後ヘラ 削り 反転復元
010	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 長石 石英	微粒	赤黄色	明黄茶色	ミガキ ナデ	回転ヨコナデ ナデ	(13.6)	(3.0)	-	(7.6)	反転復元
011	6	SD01	土師器 杯	長石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤茶色	淡赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.0)	-	-	-	反転復元
012	6	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	細粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(12.8)	-	-	-	反転復元
013	6	SD01	土師器 杯	長石 角閃石 赤色酸化土粒	細粒	淡灰茶色	淡赤茶色	回転ヨコナデ ミガキ	回転ヨコナデ	(13.4)	-	-	-	反転復元
014	6	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	明赤茶色	明赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.0)	-	-	-	反転復元
015	6	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	明赤茶色	明赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(15.4)	-	-	-	反転復元
016	6	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(14.2)	-	-	-	反転復元
017	6	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	細粒	淡赤黄色	赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(12.4)	-	-	-	反転復元
018	6	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(14.2)	-	-	-	反転復元
019	6	SD01	土師器 杯	長石 角閃石 石英	微粒	淡黄茶色	淡黄茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(12.2)	-	-	-	反転復元
020	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 長石 赤色酸化土粒	微粒	暗赤茶色	暗赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(12.2)	-	-	-	反転復元
021	6	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.4)	-	-	-	反転復元
022	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 角閃石	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.2)	-	-	-	反転復元
023	6	SD01	土師器 杯	黒雲母 長石	微粒	黄褐色	黄褐色	一部ミガキ	回転ヨコナデ	(15.0)	-	-	-	反転復元
024	6	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	明黄茶色	明黄茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(17.2)	-	-	-	反転復元
025	6	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(15.2)	-	-	-	底部ヘラ削り？ 反転復元

表3 遺物観察表②

遺物 番号	押印 番号	出土区 遺構名	器種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口徑	器高	胴部 最大径	底径	
026	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤黄色	淡赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(15.2)	-	-	-	反転復元
027	7	SD01	土師器 杯	長石 角閃石 赤色酸化土粒	小粒	明赤茶色	淡茶褐色	ナデ	回転ヨコナデ	(12.4)	-	-	-	反転復元
028	7	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	淡茶灰色	淡茶灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(14.4)	-	-	-	反転復元
029	7	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(14.6)	-	-	-	反転復元
030	7	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.4)	-	-	-	反転復元
031	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ ナデ	(11.8)	-	-	-	反転復元
032	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	小粒	黄白色	黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(13.4)	(3.7)	-	(10.0)	底部ヘラ削り後ナデ 反転復元
033	7	SD01	土師器 杯	石英 赤色酸化土粒	細粒	赤黄色	赤黄色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(12.8)	3.5	-	(7.6)	底部ヘラ削り後ナデ 反転復元
034	7	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	(8.6)	底部回転ヘラ削り 反転復元
035	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	明黄白色	明黄白色	ナデ	-	-	-	-	7.6	底部ヘラ切り離し後ナデ
036	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	小粒	淡赤茶色	淡灰茶色	回転ヨコナデ ナデ	ナデ	-	-	-	7.3	底部回転ヘラ切り後ナデ
037	7	SD01	土師器 杯	長石	微粒	淡黄白色	明赤茶色	一定方向ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	5.9	底部ヘラ切り離し
038	7	SD01	土師器 杯	金雲母 長石 赤色酸化土粒	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ ナデ	(12.8)	(3.5)	-	(8.0)	反転復元
039	7	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	細粒	淡赤茶色	赤褐色	回転ヨコナデ 不定方向ナデ	回転ヨコナデ	13.4	4.3	-	7.9	底部ヘラ切り離し後ナデ 反転復元
040	7	SD01	土師器 杯	石英 赤色酸化土粒	細粒	明赤黄色	淡黄色	回転ヨコナデ 不定方向ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ 反転復元
041	7	SD01	土師器 杯	赤色酸化土粒	微粒	明赤茶色	明赤黄色	回転ヨコナデ 手持ちヘラナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	7.0	底部回転ヘラ切り離し
042	7	SD01	土師器 杯	長石 赤色酸化土粒	細粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部回転ヘラ削り
043	7	SD01	土師器 杯	金雲母 黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	明赤黄色	淡灰白色	ナデ	回転ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	底部ナデ
044	7	SD01	土師器 杯	角閃石	微粒	赤黄色	赤黄色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
045	7	SD01	土師器 杯	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
046	7	SD01	土師器 杯	長石 黒雲母	微粒	赤褐色	赤褐色	回転ヨコナデ	ミガキ	-	-	-	-	底部回転ヘラ削り後ナデ
047	7	SD01	土師器 杯	長石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
048	7	SD01	土師器 杯	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	黄白色	黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
049	7	SD01	土師器 杯	長石 赤色酸化土粒	微粒	明黄色	明黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
050	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡赤黄色	淡黄色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	(21.2)	-	-	-	天井部回転ヘラ削り後ミ ガキ 反転復元
051	8	SD01	土師器 蓋	石英	微粒	淡赤茶色	赤茶色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	(18.0)	-	-	-	口縁部貼り付け 反転復元
052	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 石英	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(15.0)	-	-	-	反転復元
053	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 石英 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ 回転ヘラナデ	回転ヨコナデ	(14.2)	-	-	-	反転復元
054	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 石英 赤色酸化土粒	微粒	明赤茶色	明赤黄色	回転ヘラミガキ ナデ	回転ヘラミガキ	(10.8)	-	-	-	天井部回転ヘラ削り後ナ デ 反転復元
055	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 赤色酸化土粒	細粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(14.2)	(1.7)	-	(8.0)	天井部ヘラ削り 反転復元

表4 遺物観察表③

遺物 番号	探 番号	出土区 遺構名	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混 和 材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面	口 径	器 高	胴 部 最大径	底 径	
056	8	SD01	土師器 蓋	長石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	赤茶色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(14.4)	-	-	-	天井部ヘラ切り離し後ナ デ 反転復元
057	8	SD01	土師器 蓋	石英	微粒	淡赤茶色	赤茶色	回転ヘラミガキ	回転ヨコナデ	(15.0)	-	-	-	天井部回転ヘラ削り後ミ ガキ 反転復元
058	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄茶色	淡黄茶色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	(17.6)	-	-	-	反転復元
059	8	SD01	土師器 蓋	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	明黄色	明黄色	回転ヘラミガキ	回転ヨコナデ	(13.0)	-	-	-	反転復元
060	8	SD01	土師器 蓋	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	明黄色	明黄色	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	(15.0)	-	-	-	天井部回転ヘラ削り 反転復元
061	8	SD01	土師器 蓋	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(17.6)	-	-	-	反転復元
062	8	SD01	土師器 蓋	長石 角閃石 赤色酸化土粒	微粒	黄灰色	赤黄色	ナデ	-	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
063	8	SD01	土師器 皿?	角閃石	微粒	明赤茶色	明赤茶色	ミガキ	ミガキ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ナデ
064	8	SD01	土師器 皿?	黒雲母 石英	微粒	淡赤黄色	淡黄色	ナデ	回転ヘラミガキ	-	-	-	-	底部ナデ
065	8	SD01	土師器 皿	赤色酸化土粒	細粒	赤茶色	暗赤茶色	回転ヘラミガキ ナデ	回転ヘラミガキ	(20.6)	1.9	-	(18.0)	底部ヘラ削り 反転復元
066	8	SD01	土師器 皿	長石 角閃石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ミガキ	ミガキ	(18.2)	(2.5)	-	(16.0)	底部ヘラ切り後ナデ 反転復元
067	8	SD01	土師器 皿	石英 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後 ミガキ	(17.6)	5.2	-	(9.0)	底部回転ヘラ切り離し後 ナデ整形 反転復元
068	8	SD01	土師器 皿	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	淡黄褐色	明黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後 一部ミガキ	(15.8)	-	-	-	反転復元
069	8	SD01	土師器 皿	赤色酸化土粒	微粒	淡赤茶色	淡赤茶色	ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	(10.8)	底部ミガキ 反転復元
070	8	SD01	土師器 皿	長石	微粒	明赤茶色	明赤茶色	ナデ	ミガキ	-	-	-	(8.6)	底部回転ヨコナデ 反転復元
071	8	SD01	土師器 皿	金雲母	微粒	淡赤茶色	淡赤黄色	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	-	-	-	(10.8)	底部ヘラ削り 反転復元
072	9	SD01	土師器 甕	黒雲母 長石 角閃石	微粒	赤黄色	赤黄色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(18.0)	-	-	-	反転復元
073	9	SD01	土師器 甕	石英	小粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	(22.6)	-	-	-	外面にハケ目あり 反転復元
074	9	SD01	土師器 甕	角閃石 赤色酸化土粒	細粒	淡赤黄色	赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ハケ目 (ヘラ調 整)	26.0	-	-	-	ハケ目は左上から右下方 向 反転復元
075	9	SD01	土師器 甕	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	淡褐色	淡褐色	回転ヨコナデ 不定方向ナデ	回転ヨコナデ	(23.6)	-	-	-	反転復元
076	9	SD01	土師器 甕	金雲母 黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	暗赤茶色	赤黄色	回転ヨコナデ 回転ヘラミガキナ デ	回転ヘラミガキナ デ	(26.0)	-	-	-	反転復元
077	9	SD01	土師器 甕	黒雲母 角閃石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	不定方向ナデ ナデ	ナデ	(8.8)	(1.6)	-	(6.2)	天井部ヘラ削り後ナデ 反転復元
078	9	SD01	土師器 短頸蓋	石英 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	明赤黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(7.8)	-	-	-	反転復元
079	9	SD01	土師器 短頸蓋	赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ミガキ	ミガキ	-	-	-	(6.8)	反転復元
080	9	SD01	土師器 短頸蓋	長石 赤色酸化土粒	細粒	淡黄白色	明赤黄色	回転ヨコナデ	ミガキ	-	-	-	(5.4)	底部ミガキ 反転復元
081	9	SD01	土師器 短頸蓋	角閃石 石英	小粒	淡赤黄色	赤茶色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	(5.4)	底部ヘラ切り離し後ナデ 反転復元

表5 遺物観察表④

遺物 番号	検区 番号	出土区 遺構名	器種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
082		D01	土鍾	角閃石 石英	細粒	-	黒色 淡灰白色 (一部)		ナデ	-		-	-	重量20g 一部欠損 (両端部)
083		D01	土師器 高坪	黒雲母 角閃石	微粒	淡黄灰白色	淡茶褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ミカキ ヘラ削り	(24.0)		-		反転復元
084		D01	土師器 高坪	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	明赤黄色	明赤黄色	回転ヨコナデ 回転ヘラ工具ナ デ	回転ヨコナデ			-		反転復元
085	0	D01	須恵器 坪		微粒	淡茶灰色	黒灰色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ				(7.8)	底部ヘラ切り跡ナデ 反転復元
086	0	D01	須恵器 壺	-	細粒	灰白色	淡灰褐色	ナデ	回転ヨコナデ	(20.8)		-	-	反転復元
087	0	D01	須恵器 高台付 坪	-	微粒	黒灰色	黒灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-		-	(8.8)	反転復元
088	0	D01	須恵器 壺	-	細粒	暗黒灰色	暗黒灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(23.4)		-	-	反転復元
089	0	D01	須恵器 壺?	-	微粒	灰黒色	淡灰黒色	円弧叩き痕	平行叩き痕	-		-	-	-
090	0	D01	須恵器 ?	-	微粒	灰黒色	灰黒色	円弧叩き痕	平行叩き痕	-		-	-	-
091	0	D01	須恵器 ?	-	微粒	灰白色	灰白色	円弧叩き痕	カキ目調整	-		-	-	-
092	0	D01	緑釉陶 器 碗	-	-	明緑白色 (緑釉)	明緑白色 (緑釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(16.1)		-	-	断面灰白色 反転復元
093	0	D01	緑釉陶 器	-	微粒	淡黄緑色 (緑釉)	淡黄緑色 (緑釉)	-	回転ヨコナデ	-		-	(6.8)	底部ヘラ削り 反転復元
094	0	SD01 攪乱	青磁碗	-	-	明灰緑色 (緑釉)	明灰緑色 (緑釉)	-	-	-		-	-	龍泉窯系
095	0	SD01 攪乱	青磁 皿	-	-	淡灰茶色	明灰緑色 (緑釉)	回転ヘラ削り	-	-		-	-	同安溪系
096	2	D02	土師質 小皿	長石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ	(9.0)	(1.0)	-	(6.8)	回転糸切り底
097	2	D02	土師質 小皿	黒雲母 長石	微粒	淡黄茶色	明赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(8.0)	(0.7 ~ 1.0)	-	(5.8)	回転糸切り底
098	2	D02	土師質 坪	角閃石	微粒	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	-		-	-	回転糸切り底
099	2	D02	土師質 坪	角閃石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ			-		回転糸切り底
100	2	D02	白磁 碗	-	-	乳白色 (釉)	乳白色 (釉)	-	-	(18.6)		-	-	断面灰白色 反転復元
101	2	D02	青磁 碗	-	-	緑白色 (釉)	緑白色 (釉)	-	-	-		-	-	断面灰白色 同安溪系
102	2	D02	青磁 碗	-	-	淡緑黄色 (釉)	淡緑黄色 (釉)	-	-	-		-	-	断面灰白色 同安溪系
103	2	D02	土師質 土鍋	赤色酸化土粒	微粒	明黄白色	暗茶褐色 ~ 淡黄白色	回転ヘラ工具ナ デ タテ方向ナデ	タテ方向ナデ	(36.8)		-	-	反転復元
104	2	D02	土師質 カマド	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	淡黄白色	明黄赤色	-	-	-		-	-	粘土を指先で引き伸ばし 成形 煤付着
105	2	D02	土鍾	黒雲母	微粒	-	淡茶褐色	-	ナデ	-		-	-	一部欠損 (端部) 重量14g
106	2	D02	土鍾	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	-	淡茶褐色	-	ナデ	-		-	-	一部欠損 (両端部) 重量20g

表6 遺物観察表⑤

遺物 番号	種別	出土区 遺構名	器種	胎土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口 径	器 高	胴部 最大径	底 径	
107	2	D02	土鉢	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒		淡黄茶褐色	-	ナデ	-	-	-	-	一部欠損（肉端部） 重量32g
108	2	D02	胎製 石製		-		淡黒灰色	-						重量4.2g 長さ4.9cm 幅1.4cm 厚さ0.1cm
109	4	D08	古式土 師器 壺	黒雲母	微粒	淡黄白色	明赤茶色	ヨコ方向ミガキ ナデ ヨコナデ	タテ方向ミガキ ヨコナデ	(25.4)	-	-	-	口縁部1/3欠損 反転復元
110	4	D08	古式土 師器 壺	黒雲母	微粒	黄白色	黄白色	ヨコ方向ハケ目 後 タテ方向 ヘラ工具ナデ	タテ方向ハケ目	-	-	-	-	
111	1	D08	古式土 師器 高坏	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	赤茶色	赤茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.2)	-	-	-	反転復元
112	4	D08	古式土 師器 高坏	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	淡黄褐色	淡黄白色	指オサエ ヨコナデ	ミガキ	-	-	-	-	外面に赤色塗彩 坏部欠損 脚部1/2欠損
113	4	D08	古式土 師器 高坏	黒雲母 長石	細粒	淡黄白色	淡黄白色	指オサエ	ミガキ	-	-	-	-	外面に赤色塗彩
114	1	D08	古式土 師器 甕	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	(21.2)	-	-	-	反転復元
115	1	D08	古式土 師器 甕	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	淡赤茶色	淡黄白色	ミガキ風ナデ ナデ	タテ方向ハケ目	-	-	-	-	胴部下部に模の付着 1/3欠損
116	4	D08	古式土 師器 台付鉢	黒雲母 赤色酸化土粒	細粒	明黄白色	淡黄白色	ナデ	ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	
117	1	D08	古式土 師器 台付鉢	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	明赤黄色	赤茶色	ミガキ風ナデ	指オサエ ヨコナデ	-	-	-	-	内面に赤色塗彩 坏部欠損
118	4	D08	古式土 師器 台付鉢	角閃石	細粒	淡茶褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ	-	-	-	5.0	
119	5	D09	土師器 坪	角閃石	微粒	淡黄茶色	淡黄茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	回転糸切り底
120	5	D09	土師器 坪	長石	微粒	黄灰色	黄灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	回転糸切り底
121	6	D10	擂鉢	-	緻密	淡灰黒色	淡灰褐色	-	-	-	-	-	-	備前産
122	6	D10	擂鉢	-	緻密	暗赤褐色	暗赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	楕円1単位1/3本 備前産
123	6	D10	擂鉢	-	緻密	淡黒褐色	淡茶褐色	-	-	-	-	-	-	楕円1単位7本 備前産
124	6	D10	甕	-	緻密	淡灰白色	暗赤褐色	ヨコナデ	タテ方向ナデ ヨコナデ	-	-	-	-	備前産
125	6	D10	磁器 碗	-	-	乳白色 （釉）	乳白色 （釉）	-	-	-	-	-	5.6	断面白色
126	7	K09	土師器 坏	角閃石	微粒	明黄色	明黄赤色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(17.0)	-	-	-	反転復元
127	7	K14	土師器 坏	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	黄茶色	黄茶色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ ヘラ削り後ナデ	-	-	-	9.0	底部ヘラ削り後ナデ
128	7	K21	土師器 坏	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	明赤茶色	明赤茶色	ナデ	ナデ	(12.8)	-	-	-	反転復元
129	7	K09	土師器 坏	赤色酸化土粒	微粒	淡黄褐色	明黄色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部ナデ
130	7	K14	土師器 坏	角閃石	微粒	淡黄白色	淡赤茶色	回転ヨコナデ ナデ	ミガキ	-	-	-	-	底部ヘラ削り後ミガキ
131	7	K14	土師器 坏	赤色酸化土粒	微粒	明黄色 ～ 淡茶褐色	明黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	底部回転ヘラ削り後ナデ

表7 遺物観察表⑥

遺物番号	種別	出土区	器種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部最大径	底径	
132	7	K10	土師質 片	長石	微粒	淡黄褐色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(11.4)	(2.6)	-	(7.0)	回転至切り底 反転復元
133	7	K19	土師質 片	長石	微粒	明黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(11.6)	(2.8)	-	(8.6)	回転至切り底 反転復元
134	7	K15	土師質 片	長石	微粒	黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(13.6)	-	-	(9.0)	回転至切り底 反転復元
135	7	K13	土師質 片	角閃石	微粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(12.4)	-	-	-	反転復元
136	7	K16	土師質 小皿	赤色酸化土粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(8.8)	(0.9)	-	(7.2)	回転至切り底 反転復元
137	7	K18	土師質 小皿	長石 赤色酸化土粒	微粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(9.2)	(1.1)	-	(6.4)	回転至切り底 反転復元
138	7	K17	土師質 小皿	-	微粒	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	(9.0)	(1.5)	-	(6.8)	回転至切り底
139	7	K10	土師質 片	-	微粒	明黄白色	明黄白色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	回転至切り底
140	7	K10	土師質 片	長石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 回転ヘラ削り	-	-	-	-	回転至切り底
141	7	K13	土師質 片	-	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	回転至きり底
142	7	K15	土師質 片	-	微粒	明黄色	明黄色	回転ヨコナデ ナデ	-	-	-	-	-	回転至きり底
143	7	K15	土師質 片	長石	微粒	明黄色	明黄色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	回転至きり底
144	7	K18	土師質 片?	黒雲母	微粒	明黄白色	明黄白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	回転至きり底
145	7	K19	土師質 片	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	回転至きり底
146	7	K19	土師質 片	黒雲母 赤色酸化土粒	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	回転至きり底
147	8	K09	土師質 蓋	黒雲母 角閃石	微粒	赤褐色	赤褐色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ ヘラ削り	(25.0)	-	-	-	反転復元
148	8	K14	土師質 蓋	角閃石 赤色酸化土粒	微粒	明黄赤色	明黄赤色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 回転ヘラ削り後ナ デ	(13.8)	-	-	-	反転復元
149	8	K21	須恵器 蓋	赤色酸化土粒	微粒	茶色	黒灰色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ	(13.4)	-	-	-	天井部回転ヘラ削り後ナ デ 反転復元
150	8	K21	土師器 蓋	赤色酸化土粒	細粒	明黄赤色	明黄赤色	回転ヨコナデ ナデ	回転ヨコナデ 回転ヨコナデ後 回転ヘラ削り	(14.0)	-	-	(10.8)	天井部回転ヘラ削り 反転復元
151	8	K10	弥生土 器・高 杯	角閃石	微粒	明赤黄色	明赤黄色	ナデ	タテ方向ミガキ	-	-	-	-	-
152	8	K09	土師器 觥	黒雲母 角閃石 赤色酸化土粒	細粒	明赤茶色	明赤茶色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ミガキ	-	-	-	(8.4)	反転復元 底部ヘラ削り後ナデ
153	8	K10	須恵器 高台付 杯	-	-	黒灰色	黒灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	(9.8)	反転復元
154	8	K10	須恵器 長頸壺	-	-	灰白色	灰褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	(17.2)	-	反転復元
155	8	K21	須恵器	-	-	灰色	黒灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	4.9	回転ヘラ切り底
156	8	K14	磨製 石斧	-	-	-	黒緑色	-	-	-	-	-	-	一部欠損 重量53g

表8 遺物観察表⑦

遺物 番号	種別 番号	出土区 遺物名	器種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
157	8	K10	青磁碗	-	-	明緑白色 (緑釉)	明緑白色 (緑釉)	-	-	-	-	-	-	断面灰白色 同安室系
158	8	K15	青白磁 合子身	-	-	灰白色 (釉)	灰白色 (釉)	-	-	(1.1)	-	-	-	断面灰白色 反転復元
159	8	K19	青磁碗	-	-	明灰緑色 (釉)	灰白色 (釉)	-	回転ヘラ削り	-	-	-	5.0	同安室系 標目1単位7本
160	0	SE01 SK23	磁器碗	-	-	灰白色	灰白色	-	-	(12.8)	-	-	-	反転復元
161	0	SE02 (SK26)	磁器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	釉薬染付透明
162	1	X01	緑釉 陶器	-	-	明灰緑色 (釉)	明灰緑色 (釉)	-	回転ヨコナデ	-	-	-	(6.0)	断面黄白色 反転復元
163	1	X05	弥生土 器 煮	黒雲母	小粒	明赤茶色	明赤茶色	ハケ目	ナデ	-	-	-	-	-
164	1	X10	土師器 坏	長石 赤色酸化土粒	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 回転ヘラ削り後ナ デ	(13.8)	3.7	-	(9.4)	回転ヘラ切り底 反転復元
165	2	-1	白磁 碗	-	-	灰白色 (釉)	灰白色 (釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(15.8)	-	-	-	断面白色 反転復元
166	2	-2	白磁 碗	-	-	灰白色 (釉)	灰白色 (釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(17.1)	-	-	-	断面白色 反転復元
167	2	2	白磁 碗	-	-	灰白色 (釉)	灰白色 (釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(16.2)	-	-	-	断面白色 反転復元
168	2	-1	白磁 碗	-	-	灰白色 (釉)	灰白色 (釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(16.0)	-	-	-	反転復元
169	2	-2	白磁	-	-	明灰緑白色 (釉)	明灰緑白色 (釉)	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	-	-	-	-	断面白色
170	2	-1	青磁	-	-	明灰緑白色	明灰緑白色	-	-	-	-	-	-	断面灰白色 龍泉窯系
171	2	調査区 表探	青磁碗	-	-	明灰緑白色	明灰緑白色	-	-	-	-	-	-	断面灰白色 同安室系
172	2	-2	青磁碗	-	-	明灰緑白色	明灰緑白色	-	-	(18.0)	-	-	-	同安室系 断面灰白色 反転復元
173	2	-1	青磁碗	-	-	明灰緑色	明灰緑色	-	-	-	-	-	(5.0)	同安室系 断面灰白色 反転復元
174	2	調査区 表探	白磁 四耳壶	-	-	明灰緑白色	明灰緑白色	-	-	-	-	-	-	断面白色
175	2	調査区 表探	緑釉 陶器	-	-	淡緑色	淡緑色	-	-	-	-	-	(8.4)	断面灰白色 反転復元

写真図版



SD10 掘り下げ状況（東より）



SD10 土層断面状況（東より）



SD10 土層断面状況（東より）



南側調査区全景（北より）



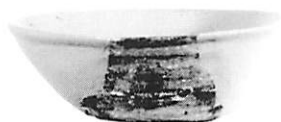
SD08 遺物出土状況（東より）



北側調査区全景（北より）



003



004



005



006



007



010



015



038



050



056



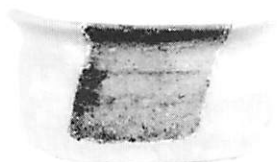
057



059



067



072



074



078

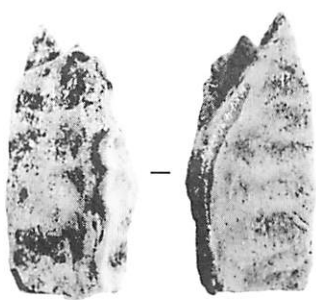


080



084

出土遺物①



104



105



106



107



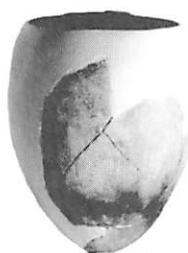
108



109



110



115



136



149



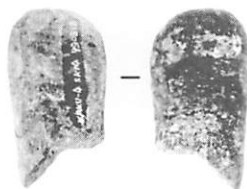
150



151



152

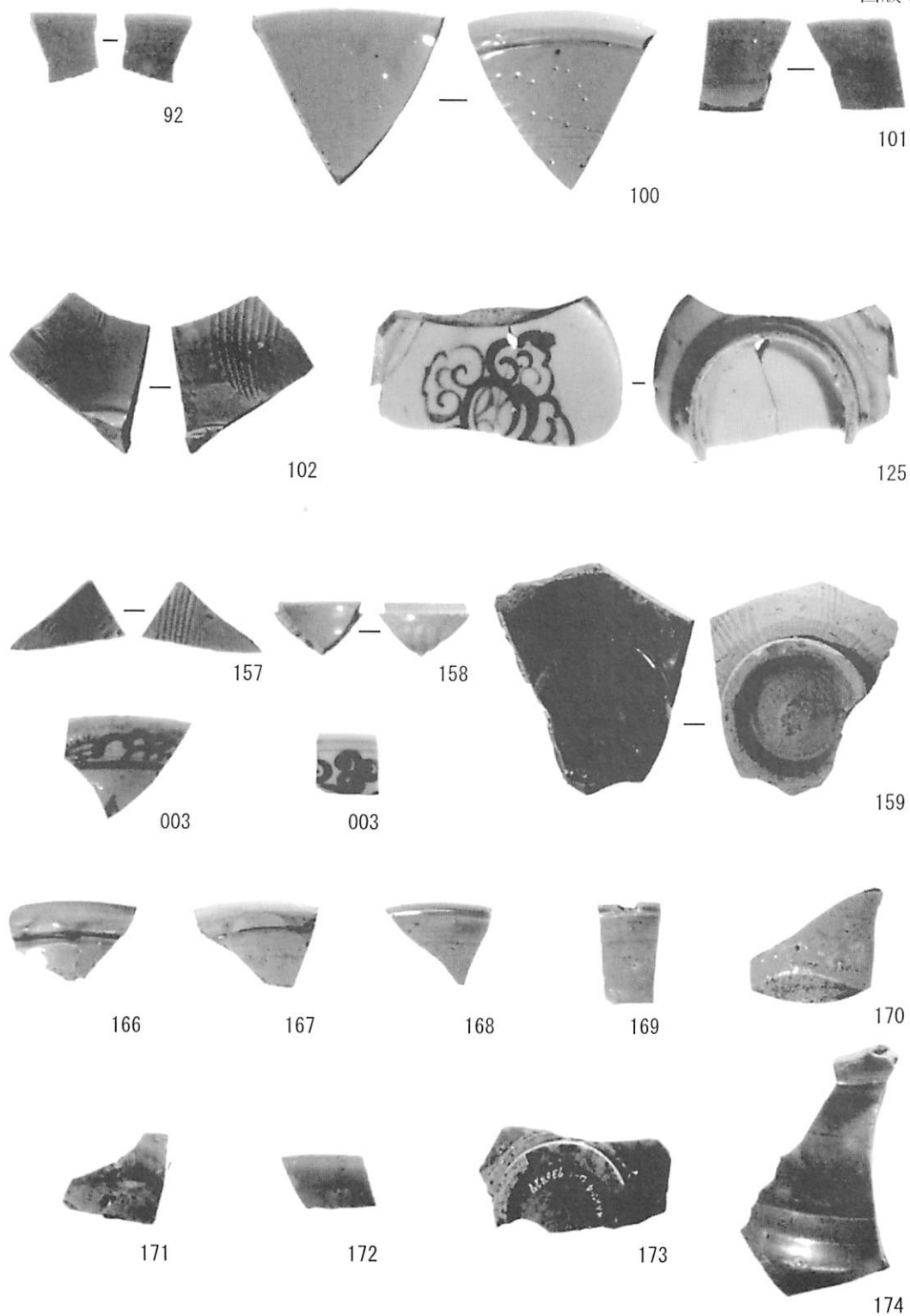


156



64

出土遺物②



出土遺物③

大分市賀来中学校屋体増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

賀来中学校遺跡

平成6年3月31日

発行 大分市教育委員会 大分市荷揚町2番31号

印刷 株式会社 新郷印刷 大分市大手町

